第２セッション
「大学放送公開講座の問題点をめぐって」

○総合司会（北海道放送・船越ゆかりアナウンサー）

それでは、第２セッションを始めさせていただきます。

大変早速なのですけれども、第２セッションのテーマは「大学放送公開講座の問題点をめぐって」でございます。

司会は、放送教育開発センターの加藤秀俊所長、そしてコメンテータが放送教育開発センター・高杉恒夫制作部長、放送教育開発センター・大橋　力研究開発部教授、そして財団法人民間放送教育協会・井出定利プロデューサーでございます。

それでは、加藤所長、お願いいたします。

○司会（加藤秀俊・放送教育開発センター所長）

おはようございます。

昨日の夕方の懇親会は年々盛り上がってまいりまして、年々だんだん楽しくなってまいりました。

第２セッションでございますけれども、お手元のプログラムでおわかりのように、ここでは、合計７つの大学からの問題提起をいただきます。

ここに報告者としてではなく提案者と書いてあることにご注目いただきたいのでございますけれども、こういうことをいたしましたというだけのことではなしに、こういう問題が残されているという各大学共通の問題が恐らく出てくるかと思いますので、そのご提案をめぐって後で質疑応答ということにいたしますが、時間の配分といたしましては、各提案当たり15分ずつ。

例外は新潟大学でございまして、こちら事前に20分間のご用意がおありだそうなので、そこだけ例外にいたします。

では、早速始めさせていただきます。

まず、東北大学、「放送講座受講生の拡大に関する研究」、これは昨日の北海道大学並びに新潟大学の共同研究では別個では決してございませんけれども、独自のご努力をいただいております。東北大学、萩原先生からどうぞ。

○東北大学（萩原敏朗教育学部附属大学教育開放センター教授）

東北大学でございますが、ただいま司会の方からありましたように、私ども東北大学の通常の研究テーマはデスクトップ・パブリッシングというテーマを掲げていまして、これは大学だけで進めておりますものですから、今回「受講生の拡大に関する研究」ということで、放送局と一緒に何かやりたいということで、こういうテーマを掲げさせていただきました。

もちろんこれは間に合わせではございません。我々にとって受講生の拡大というのは放送講座をやってからの、やはり常につきまとっている問題でもあります。東北大学はもう既に15年ぐらいになりますけれども、始まって以来、この問題は頭から離れないわけです。

昨日、北大の報告がございましたけれども、この報告を聞きながら、いろいろ感じるところがございました。

例えば、我々は15年ぐらい前の何年かにわたりましては、通信指導というものを実施したことがありまして、放送講座へは必ず毎回毎回に問題を受講生に出しまして、そして、戻ってきたのに添削して返すようなことをやっていた時期があるのです。今言いますと、双方向ということになるのかもしれませんが、これが担当の先生にとっては大変な負担でございまして、そしてある時期は模範解答を送ることで間に合わせたようなこともありましたし、ただ、そういうことで非常に大変だった。そして、やはり昨日の報告にもありましたように、受講生にとって本当にそれがいいのかどうかというようなこともありまして、やはりやめざるを得なかったこともありますし、さらに市町村の連携ということも我々もずっと取り組んで、初期のころからそういうことをやっていまして、例えば、そういう市町村で開く学習センターのようなところのチューターのためのビデオをつくったこともあります。

そんなことで、受講生の拡大ということは、我々にとってずっと、まさに放送講座の宿命のテーマでもあるわけですが、ただ、我々の力には限界がございます。そういうことで、東北大学では自然体で行くということで、今あるものは切り捨て、やれるものをやるというようなところで実施しているような気がしますが、しかし、受講生の拡大については、いつも最大限の努力をしているということが我々の現状でございます。

そういう中で、我々常々感じています問題の１つなのですが、やはり受講生が集まってきますと、その方々に対して、例えば受講生調査であるとか、理解度調査であるとか、そういう調査をずっとやってきているのです。こういう調査を我々はもう何年も続けてやってきているのですが、そういう調査をやっていて感じますのは、集まってきた受講生だけに調査をして一体どうなるのか。例えば、我々はやっぱり受講生というのが非常に学習意欲が旺盛で、そしてとにかく熱心に取り組む。きのうの報告にもありましたけれども、そういうようなことは印象として持っているわけです。それが果たして、本当にそういう人たちがどういう人なのかということを、やはり具体的な社会の中で位置づけるような作業というのをどうしたらできるかということの問題を常々感じてまして、その１つの方法としては、例えば、普通の一般の市民、あるいは地域住民でもいいのですが、そういう地域住民の中で放送講座なら放送講座の受講生というのがどういう人たちであるかということを浮き彫りにするような、何らかの工夫が必要であるということを常々考えておりました。

ただ、そういう調査というのはかなり経費がかかりますし、大変手間暇がかかるわけでございますが、幸い、３年ほど前、教育学部の我々の研究室に学生が、教育学部というのは70人ぐらいの定員なのですが、30人を超える学生が上がってきたことがあるのです。この学生たちを使って、では仙台市で調査をしてみようということを企画いたしました。その結果をきょうは持ってきまして、その報告の一部を紹介しながらこのテーマに引きつけて、少しこれからご説明したいと思います。

きょうは「放送講座の認知度と広報活動の課題」というテーマを掲げたわけですが、つまり我々は日ごろいろいろな受講生と接しているわけですが、一般の人たちがどれだけ我々の放送講座のことを知っているのかというようなことは、なかなかわからないわけです。もちろん我々の場合は、宮城県全域で調査をしているわけですが、全域で調査するにはちょっと今回はできなかったわけですが、仙台市という範囲でやったわけです。

そこに調査の仕方を書いてありますけれども、かなり科学的に厳密なサンプリングをいたしまして、1,200のケース。ただ、仙台市というのは大変やはり都市化が進んでおりまして、33人ぐらいの学生が仙台市の調査地点の地区に潜りまして、いろいろ駆け回って、集めてきた調査の結果なのですが、やはり目標の70%、75%は到底行きませんでしたけれども、69%という回収率を得ました。そして、得た結果がここに掲げているものでございます。

例えば、そういう中で、かなり膨大な調査の本当の一コマしかご紹介できないわけですが、東北大学の大学教育開放センターというのは、つい今から15年以上前、昭和48年にできて、非常にたくさんやっているつもりなのですが、果たして仙台市民がこの大学教育開放センターのことをどれだけ知っているかというようなことは、我々にとって興味深いことだったのですが、そんなことを聞いてみた結果が一番最初に掲げているものでございます。

それとあわせまして、クエスション42というところで聞いているのが放送講座がどれだけ知られているかということを聞いてみたわけです。この段階で、やはり半数以上の方がそういうのを知らないということでございました。知っているのは35%、そしてその放送講座を見たことがあるという人が、そこに掲げてありますように、3.7%という、恐らくこれが現実の姿なのでないかと思います。

我々は最も古くから開放講座、放送による講座をやっているわけです。昭和51年から始めてきているわけです。そして今、仙台市で我々は本当に一生懸命いろいろとやっているわけですけれども、こういう現実が1つ、これがやはり実態であるということで、我々もこれをまたどう考えたらいいかということで、ぜひ考えていきたいと思います。視聴した人が 3.7%なのですが、受講した人はやはり我々が会った仙台市民の800人を超える方の中には1人もいなかったということでございます。

そういう中で、放送講座の受講生と、非常にいろんなことで学習時間とかで違っているようなものが浮かび上がってきているのですが、そういう問題はきょうは外しますが、放送講座の認知がどういうふうになっていたかということで、後ろに見にくいグラフで申しわけありませんが、グラフにして出してみました。

そして、センターの認知と対照して見ていただきたいと思いますが、放送講座とやはりセンターの認知、センターの存在そのものが我々にとっては非常に大事だと思っているのですが、我々よりも放送講座の方の認知の方が高いというようなことが1つございますが、やはり放送講座の認知の中にも、センターの認知と非常に違っているようなところがあります。

例えば、2ページ目で、年齢別に見ていただきたいと思いますが、年齢別で若い層がかなり知っている人が多いのです。こういうことは、ただ放送講座の受講生になる人は必ずしも若い層には限ってないというところがあります。こういうところで、テーマの設定とか、そういうところでやはりいろいろ考えていくべきことがあるのでないかというふうに思うわけでございますが、その次のページをごらんいただきますと、学歴でいいますと、やはり学歴の高い人の方が認知が高いということ、これはもしかしたら当然なのかもしれませんが、そういうことが浮かび上がってまいります。

それから、センターの認知と対照して、言うべきこともたくさんあるのですが、時間がありませんのでどんどん進みますが、次の4ページ目を開いていただきたいと思います。放送講座

の認知のところで、職業別で見てみますと、教職員とか研究職の方ですと知っているパーセントがぐっと上がるわけですが、そのなかちょっと興味深いのは、主婦・家事手伝いの方の中で放送講座を知っている方のパーセンテージが平均よりちょっと低くなっているという、この辺がやはり僕は注目しております。

と申しますのは、我々の放送講座をずっと見てきますと、やはりメディアを介してやるという点で、主婦の方々が非常にこれを使って勉強するということでは大変いいのです。ですから、受講生の中にも主婦の数が多いのです。ただ、こういうふうに実態を見てみますと、仙台市民の主婦の方の中で知っている方のパーセンテージがやはりこれだけ低いということは、こういうところの、これからのいろいろ広報の仕方等について、いろいろ示唆するところがあるのではないかというようなことを感じているわけでございます。

次のページは、これは我々の場合は仙台市民意識調査ということで、仙台市へのいろんな帰属意識であるとか、あるいは『市政だより』をどれだけ読んでいるかとか、日ごろ地域のことにどういう問題を持っているかとか、いろいろなことの質問をしているわけでございますが、そういうことと幾つか掛け合わせてみた結果でございます。１つは『仙台市政だより』をどれだけ読んでいるかというようなところで、当然なのかもしれませんが、やはり毎号欠かさず読むような方には放送講座あるいはセンターの認知も高いようなことが出ていますし、それから、札幌と同じく仙台も今のスパイクタイヤ粉じん問題というのが大変社会問題化しているわけですが、こういう問題への関心度とこの放送講座の認知度なんかを掛け合わせてみるとこういう結果である。このほか、たくさんいろいろおもしろいことが出てまいります。

しかし、時間が押し迫ってまいりますので、急ぎますけれども、少なくともこういうふうに見ますと、我々の放送講座の認知という、こういう結果から見ても、いろいろやるべきことはたくさんあるのでないかというようなことを感じるわけでございます。

本年度、我々はどういう形で広報活動をやってきたかということをちょっとこれからご説明申し上げますが、我々はもう当初から市町村との連携ということは、ずっと常々進めてきておりまして、もちろん宮城県全体のそういう教育委員会、あるいは公民館等への広報活動は万全を期しているわけです。ポスター等をつくり、パンフレット等をつくり、皆送るわけでございます。

ただ、昨日のように、それをどのように広報先がやっていただくかはわかりませんけれども、とにかくお願いしてやるわけです。

それから、仙台市政だよりも含めて、各市町村の広報手段をぜひ使ってくださるようにということで、各市町村にもお願いします。

ただ、それが前期の初めのころは、かなりそういうようなことでいろいろやってくれたこともありますが、やはり毎年毎年こうなっていきますと、やはり先方のスペースがある場合に、どうもなりがちなのです。そうしますと、大体我々のふだん持っております広報手段というのは、パンフレットを受講生の、既に去年、おととし受講した受講生に送るダイレクトメールというのが我々にとって非常に大きなものになるのですが、そういうようなことが我々にとっては中心にならざるを得ないところがあるわけです。

それで、本年度我々の講座の記者会見で発表したのは、ちょうどお盆の前の８月上旬でござ

いましたが、そこから広報活動を開始しまして、そしてどういうふうにそれがふえてきたかということが6ページ目に乗っている表でございます。

8月24日の段階で74人、そして8月29日に17人という、こういうふうな受講生が登録してくるわけです。今のはテレビでございますが、ラジオについては、8月24日の段階で67人、そしてその隣に括弧書きがありますが、これが前年度の受講生でございます。つまり我々のダイレクトメールが効いた。もちろん8月18日は地元の最も大きな影響力のあります『河北新報』には講座の存在、広報をここでしていただきました。

実際はこういう形で我々のダイレクトメール、やはり固定層がやはりかなり上ってくるというところで、どれだけ末広がりに広がっていっているかというところでは、たくさんいろいろ問題を感じざるを得ないわけです。もちろんこれに並行いたしまして、放送局の方では、もうそこにいろいろ表として掲げておりますようなスポットをどんどん流すわけです。こういうことをしながら、しかし、その広報がどういうふうに結実していくかというところではいろいろ問題があるわけです。

もちろん我々としても、従来どおり、市町村のいろいろな広報の活動の協力、あるいは例えば、本年度も私自身が仙台市の広報室を訪れまして、お願いして回るとかをいろいろやるわけでございますが、しかし、そういうことを幾ら行っても、場合によっては市勢だよりの載る記事というのは、あまり優偶されない場合もあるわけです。つまりこれが我々の限界なのではないかというふうなことを感じるわけでございます。

あと、放送日程等については、ちょっと放送局の方からいたします。

○東北放送（近田達夫テレビ局部長）

それでは、制作の側からの意見といいましょうか、感じておることを申し上げたいと思います。

司会の加藤先生からはっきり提案であると枠をはめられましたので、なかなか申し上げにくいところもあるのでございますが、それは1つは視聴者という、はっきり形として見えないものを相手に私ども、いわば勝負をしてまいるわけでございます。

既に各大学、放送局等で実施されていることもあろうかと思いますけれども、あえて私ども考えていることを申し上げてみたいと思います。

ただし、経験的な面でお話をするしかございません。

1つは、私ども局でございますので、当然テレビ、ラジオのスポットという形で、これは短いものでございますが、1単位30秒なり15秒なり20秒なりということで出していくわけでございます。それと同時に考えますのは、新聞には記事として大学側から載せていただくという格好をとっているわけでございますが、同時に私、これからは広告という格好で出すことが必要ではなかろうかと、これはラジオ、テレビという電波媒体と新聞という媒体の持つ、それぞれの特性を用いまして、相乗効果を上げるべきであろう。それから、自治体広報につきましては、今萩原先生がお話しになりました。

それから、もう1つ考えますのは、私どもでできるものとしては、番組でございまして、ワイド番組等を持っておりますので、その中で、いわゆる東北大学開放講座ということにこだわらず、今後ご出演いただく、講師になっていただく先生方の業績とか研究というものを話題と

して紹介していくということはいかがかと思います。

これは放送講座が終わりました後、新聞で２、３、先生方の研究が紹介されるという効果といいますか、結果を生んでいるということからも類推できるのではないかと思います。

まだ申し上げたいことはたくさんございますが、以上で終わらせていただきます。

○司会（加藤）

ありがとうございました。

次は、引き続きまして、新潟大学。

○新潟大学（石田幸平教養部教授）

新潟大学です。

本年度から私ども30分番組を初めて試みたわけであります。

今後のまた30分番組をなさる大学、あるいは私どものこれからのことも考えまして、いろいろ問題点を整理しまして、若干のご提案を申し上げたいと思います。

ただ、お断りしておきたいのですけれども、まだ放送が続いておりまして、30分番組というのは長く続きますので、３月３日の最終スクリーンでやっと終わる予定でおります。主任講師、それから担当ディレクター、それから受講生の人たちに、最後にまた調査していかなければなりませんので、きょうお話し申し上げるのはその中間報告という形にならざるを得ません。

まず、主任講師の経験からお話しいたしますけれども、先ほども申し上げましたように、私ども45分番組13回というのをやっていたわけでありますが、私どもは３年前から計画を立てて、準備しておりました。それが予算が認められ30分番組というふうになりましたので、主任講師の方たちは大変その点では戸惑いがありまして、テキストづくりなどで戸惑った面があったと思います。特にテレビの場合は、22名の講師からなっておりますので、13回の分をどういうふうに手直しするかと、新しい章を入れるのか、１つの章を２つの章にするかとか、そういった大分困ったこともあったようであります。

ただ、30分という時間単位はとても自然な流れというので、それぞれの講師の方たちは違和感を感じなかったというように言っております。

ただ、私もやはり大学の講義というのとの違いがありますので、テキストの１章に盛り込む内容をどうするかと、そういうことになりますと、30分というのでやはり戸惑いがありまして、新講師の感想では、何か学会発表の寄稿集みたくなってしまったと、そこの反省するというようなことであります。

それから、最後にその新講師の今までのところの感想では、30分番組20回ということですので長丁場であります。約５カ月間縛られる。そうすると、さらに担当講師やゲストのことを考えますと、その人たちの時間調整というのにもいろいろ苦労せざるを得ない。そういったことで、少し長丁場過ぎるのではないかというのがありました。これも今後検討して、来年は少し短くしようかということにしています。

それから、放送局の方の番組制作担当者のインタビューもしましたが、それもかいつまんで申し上げますと、放送局の立場としましては、30分というのは手慣れた時間単位ですので、45分よりいいというお話でした。ところが、テキストの内容は45分番組と同じぐらいの分量になっていると、それをどういうふうに整理するか。山を２つとか３つに設けるように努力しなけ

ればならない。できるだけ主張しやすい、わかりやすい、訴えられやすいものにすると。そういう点で、やはり苦労したという話でした。

第３に、内容充実のためには、30分番組はより一層講師と打ち合わせする時間が必要だということですので、来年度から私ども、もう少し時間をとって十分準備期間をとって、それで取り組もうということにしています。これも何かご参考になるのでないかと思います。

先ほど主任講師の方でも少し長丁場だったということですが、放送局の方も長時間にわたる制作で、スタッフの量も作業量もとにかくふえて大変であったということでした。非常に一生懸命やってくださったのですけれども、そういった問題点がありました。

ただ、私どもはこういう大学や放送局のことばかりではなくて、受講生が一体どういうふうに考えているのか。受講生が30分番組についてどういう要望を持っているのか、そこらをやはり知るのが重要ではないかということで、放送局と私ども、いつも緊密な連携をやっておりまして、一緒に調査しようということになりました。そこのところは対間ラジオ局長からお願いします。

○新潟放送（対間英洋ラジオ局長）

ただいま石田先生からの放送公開講座に対する大学、それから放送局の取り組み、それから主任講師や制作者の聞き取り調査などについてお話しいただきましたけれども、一般の視聴者はこの番組が45分から30分になったということにつきましてどう見たのでしょうかということで、きょうは時間の関係もございますので、テレビの視聴率をごらんいただきたいと思います。

ＶＴＲスタートお願いします。

過去３年間の視聴率を見てまいりました。

テーマの方は、一昨年は「脳の発生とその生涯」でございました。これがそうです。昨年は「雪国の住まいと都市」でございます。そして、今回はごらんのように平均で４％台、最高で5.6％で、これは過去最高の視聴率を記録しております。

放送のスタート時間の方は、過去変更ございません。

では、受講生はどう受けとめたのか、３年以上受講している人で比較的熱心な10人を選んでインタビューしてみました。ほとんどの方がラジオ、テレビともに受講しております。

――― ＶＴＲ ―――

○新潟放送（対間）

受講生の方の意見でしたけれども、では一般の視聴者はどのように見たかということですけれども、これは実施報告の概要の34ページにテレビディレクターの大沢次長がまとめたのを持っておりますので、ごらんいただきたいと思います。

テレビ講座につきましては、70％から80％の方が30分の方がよいと答えております。ラジオ講座の方でも大体同じような答えが返ってきております。

また、担当ディレクターの番組制作を終えての感想の方ですけれども、テレビが34ページ、ラジオは37ページに載せておりますので、ご参考にしていただければと存じます。

大きくはテーマの絞り込みがより一層重要になったのではないかということであります。それから、テーマから派生してまいりますところの膨らみといいますか、余裕といいますか、そういうものがなくなったという反面、整理されて受講生にとりましては、見やすく聞きやすく

なったのではないかというふうに言っております。

それから、制作に要する時間は、放送時間が短くなったということでは決して減ってはおりません。

それから、回数がふえて、先ほど石田先生も申しておりましたけれども、ちょっと大変ではございました。ですが、ティレクターにとりましては、30分になって、おおむねつくりやすくなったと言っております。やはり、時間的に手慣れているということになるのでしょうか。

私ども、番組制作に当たりますスタッフにとって大切なことは、この公開講座番組は、まず何よりも受講生を第１に考えるべきだと考えておりまして、30分の講座につきましては、これからも実験精神という感じで取り組んでまいりたいと思っています。

○新潟大学（石田）

それでは、最後に、今の受講生の問題ですが、私どもはテレビ、ラジオの受講生たちを熱心な受講生たち40名の人たちにアンケート調査をいたしまして、30分番組の長所・短所ということでやりました。90％の回収率があったのでありますが、それをちょっとお見せしたいと思います。

表１、ちょっと見づらいかもしれませんが、大体、長さとしては30分番組というのはよいと、90％近い人たちがいいと、そういうふうに答えております。

表２、次に、テレビの方でありますけれども、テレビでもおおむね長所の方が多いので集中できるとか、理解することができる、楽に視聴できる、先ほどビデオでも言っていました。ここで注目すべきことは、真ん中あたりにありますが、番組の途中で用ができても融通できるとか、そういうことを言っているのです。これは私どもは大学の公開講座というものは、イコール熱心な受講生あるいは大学生像みたいのを考えてしまうわけですけれども、きのう高田先生がおっしゃったように、実際は生活している人なのだと。カウチ・ポテトではなくて、生活している人ですから、例えば電話がかかってきても、30分だったらちょっと待ってくださいと言って番組を聞くことができる、あるいは30分だから何か融通できると、そういう実際には生活している人なのだということをとてもよく感じました。

次に、短所としましては、１回ごとの内容が少な過ぎるとか、それから先ほどもありましたように、講師が早口になると。これはやはり気をつけなければならないのではないかと思います。そういった点は今後気をつけたいと思います。

それから、表３、今度ラジオに行きます。ラジオもテレビと同様。公表でありまして、ここでも私ども気がつかなかったことでありますが、１つ注目すべきことは、高齢者に適した長さというのがわかりませんでした。ある人たちが、先ほども述べておりましたけれども、大学でやる公開講座で90分、あれがとても長くてつらいと。45分も長い、疲れると。高齢者は、本当のところ30分というのは実に助かったと、そういうことを言っています。

前に加藤先生おっしゃっていたことがありますが、極端な場合にも10分とか５分の公開講座とか、これは極端かもしれませんけれども、高齢者のこれから生涯学習意欲というのはますます強くなってくると思いますので、こういうふうに30分番組にするというのは非常にいいことではないかと、私ども意を強くしております。

もう１つ、そこにもありますけれども、録音テープの長さに30分というのがぴったりでいい

と、そういうのがあります。

我々の気がつかなかった、そういう受講生たちの声、そういうようなことをこれからも大いに入れていきたいと思っております。

先ほど、音楽の挿入が多くて物足りないと、いろんな批判もありましたけれども、最後に、先ほどから言っておりますように、30分番組20回でやったわけですが、15、6回がいいというような声、やはり制作の期間、それから大学の方としても時間に大分縛られますので、そういう意味でも15、6回という声も出ておりますので、来年度は少し短くするというようなこともぜひ考えたいと思いますし、これから30分番組に取り組まれる大学、放送局の何かご参考になればと思って、きょうはご報告しました。

以上です。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

それぞれのご報告について、ご質問やご意見あるかと思いますけれども、進めさせていただきます。

それでは、次は、信州大学、白井先生、筒井先生、よろしくお願いいたします。

○信州大学（白井汪芳繊維学部教授）

信州大学でございます。

信州大学では、テキストの問題とスクーリングの問題を、私、テレビの白井と、スクーリングの問題はラジオの筒井先生が提案させていただきます。

早速でございますが、テキストに対する経験から、色々な提案をちょっとさせていただきたいと思うのですけれども、スクーリングで、映像教材の長所と短所というのをいろいろ聞いてみましたら、大体対応するようにできているのですけれども、映像の場合はその実物とか、実験、現場で動画で見れるという、反対に短所としては、複雑な模式図だとか、数式を余り使えないというようなことがありまして、深く勉強できないというような点が出てまいります。

当然ですが、講義調のビデオはつまらないというのも非常にあるのですけれども、それから、繰り返し学習、これは高齢者、我々より年上の機械に弱い人たちが多いのでないかと思います。最近の子供たちはぱっぱっとやれますけれども、あれがどうも面倒で本のほうがいいというような話もございました。それから、以外とメモがとりにくいというのがあります。それから、印象としては残るのですけれども、忘れやすいという。それから、内容がコンパクト過ぎるとか、あるいは手軽にもう一回復習できないとか、参考文献がない。

こういう映像教材としての欠点をどういうふうにすればいいかというようなことを少し考えさせていただいたのですけれども、まず内容の点でございますけれども、今回の場合は繊維ということで、非常に特殊なものを取り上げたのですけれども、大学の教科書に使えるとか、あるいはある程度一般にも売れるとか、いろいろこちらの注文が多いものですから、どこに焦点を絞るかというのが1つの問題点だと思います。

本屋に並んでたくさん売れると出版社も一生懸命になってくれますので、こちらの要求を聞いてくれるのですけれども、そういう点でもおもしろく読めるかというのが一番問題ではないかというふうに思います。おもしろいもの、自然現象、生活に役立つかと、これはすごいと思

わせるか、トピックス的な話題とか、逸話とか、歴史的な話題とか、いろんなそういうものが挙げられるのでないかと思います。

それから、従来の教科書風、基礎応用とか、あるいは理論が中に入ってという、そういう組み立てではなくて、おもしろいという話題を提供しなければ、それなりに希望を入れるというのが大事でないかというふうに感じます。

それから、そういう点でどういうふうに展開したらよろしいかということで、我々のところでは、まず最初に各章の１項目目にその章の導入とわかりやすいような、興味を引くような内容をまず刺激として最初に与えてしまうと。200字程度でシンボル的な写真を導入するというようなことをやったらどうかということで試みてみました。

それから、基礎的なやはり学問をいかにわからせるかということは、これは非常に重要な問題でございまして、従来の物理とか、化学とか、生物とか、そういうものにとらわれないで、わりかし重要なものというのは高校レベルで理解できるように全体的に貫いていったらどうかと。それで、大学のレベルへのつなぎとするようなこと。

それから、最後の方にはやはり夢と創造力をかき立てるような、そういう内容を入れたらどうかということを感じました。

それから、節等の終わりの方には著書とか、総説とか、解説とか、そういうものを10編程度くっつけるというようなことがいいのでないかというふうに思われます。

それで、最初のページなのですけれども、余りこれはいい例ではないのですけれども、これは要するに繊維を衣料として着るときのサイエンスをどうしたら快適に着れるかというような内容の話なのですけれども、イノアメニティというようなタイトルで、それで、これは宇宙服なのですけれども、ＮＡＳＡから写真を借りてきまして、こういうのを最初につけて、ここに書いてあるようなそういうようなものをやるということを、各章について全部一貫してこういったようなものを取り上げてみました。

それで、問題点なのですけれども、これはいろいろなものがございまして、とにかく著者が非常に多い場合、なかなかビデオをつくって、教科書をつくって、それぞれ先生方、最近どういうわけか知らないのですけれども、大学の先生がやたら忙しくなってきて、いろいろな仕事が飛び込んでくるのですけれども、そういう中で、時間を割いてそういうことを一貫して何人かがやるというのは、これは非常に大変なことでございまして、まず締め切りが間に合わないとか、それから内容の統一性が欠けるとか、いろいろな文章が出てきて、それを全部編集するというのは至難のわざなわけです。そういうのを短い時間にぱっとやるというのは、どのようにやったらいいかというのが１つの大きい問題点でないかと思います。

それから、どうしても大学の先生方が集まると、文章がかた過ぎて難しくなり過ぎると。電車の中で気軽に読んで頭に入るような文章というのを、いかにうまく書くかというのは、これは一生の課題でないかというふうに思うわけですけれども、それから、いろんな注文が備わりますので、それを焦点をどこに絞っていくかと、下手をすると非常に中途半端なものになってしまうと。とにかくいい印刷教材をつくるには、たくさん売れてくれることが必要なわけで、その点でこの本はちょっと買ってみたいと思わせるような工夫というのがいろんなところで大事になると思います。

それから、映像教材をつくったのは、例えば、こういうことを言う先生がいるのですけれども、業績にならないのでなかなか手抜きされてしまうのです。それで、唯一きれいな本なり、著書なりにしてやると一生懸命やってくれると。だから、ここをいかにうまくやるかというのが非常に大事な点でないかと思います。

それで、まず最近の本がなるべく買っていただけるという条件の中に、ちょっと抱えていってもファッショナブルであるというのはあるそうで、そういうのをちょっとハンドバッグなんかに忍ばせていくというようなことで、出版社の人も大分協力してくれまして、このような表紙できれいなものをということで今回やっていただきました。

それで、そういう中に１つは、こういうファッションの写真を、コシノジュンコさんのところに行って、いただいてきたわけなのですけれども、こんなようなこともひとつ大事でないかというふうに思います。

以上でございます。

では、筒井先生、お願いいたします。

○信州大学（筒井健雄教育学部教授）

それでは、次に、スクーリングのあり方についてということですが、これちょっと今のテキストの問題と統一がとれないようですが、ご存じのように、信州大学はたこ足大学ですので、繊維との連携がちょっとうまくとれない面がありまして、たまたま今回の中間報告というときに、第１回目のスクーリング、それをやって問題点を感じていたものですから、そのスクーリングのあり方についてと。あり方と言っても、これはテーマは「子供と大人の心の健康」というテーマなのですけれども、スクーリングについてはちょっとご参考までに、これはぶ厚いのを昨日配付していただきましたが、平成２年度放送利用の大学公開講座実施報告の概要というのがございます。これの63ページのところ、ちょっとお聞きください。

そうしますと、ここのところに第１回としてＡＢＣＤ、それから第２回修了式というような表が出ております。

これが伊那市伊那公民館で第１回のスクーリングをやったわけですが、これが予定、例えば受講生のはがきが返ってきて、それに伊那のスクーリングに出るつもりだという場合には丸をしていただいているわけですが、その予定者数が、ここへちょっと書き込んでいただければわかると思いますが、18名あったのですが、実際に出ていただいたのが７名だったというわけです。ご存じのように、長野県は長野から伊那へ出ていくのに、縦、南北に長いものですから、東京へ行くよりも時間がかかるわけです。それで、それだけの労力を払って講師が行きながらも、受講生の参加の方が少ないということは、我々としても残念ですし、同時にこれは、こういう問題については潜在的な要望というのは実際に多くあるのでないかというようなことを帰り道に講師たちが話し合いまして、そして何とか掘り出す方法はないだろうかということで、これが今回の提案の趣旨なのですけれども、どういうようにしたらいいだろうか。

１つは、マスコミ・ミニコミの活用についてという問題が提案されるわけですが、マスコミ・ミニコミと言っても、そういう言い方がいいかどうかわかりませんけれども、この場合には、例えば、マスコミとしてはＳＢＣのテレビ、ラジオ、あるいはまた新聞としては、全国というわけではないですけれども、割と有名な新聞で『信濃毎日新聞』というのがあるわけです。そ

れで、そこに広告を載せてもらったらどうだろうかと。あるいはまた地方、例えば次回は上田であったわけですが、上田の地方の新聞に載せていただいたら受講者層を彫り出すことができるのでないかというわけで、知人にお願いして、そういう新聞社あるいはケーブルテレビ、そういうところへＰＲをお願いしたわけなのです。

その結果をちょっと見ていただきますと、同じくＢのところを見ていただきますと、受講生の出席希望者は30名あったわけです。そして、そのときには実際の出席者が31名というわけで、ほぼ予定どおりになったわけです。同時に、初めて出席したという方が14名いたわけなのです。

それでＣのところ、これは長野市であったわけですが、これは出席希望者、予定者というのは 194名あるのですが、これは実は、この講座というのは、我が学部では、信州大学のやり方としては学生にも聞けるようなものをねらおうというわけで、学生にもある程度進めている面があるのです。それで、ある程度半強制的といいますか、学生が出しているカードがあるわけですが、実際に出てくるのは一般の方であるわけです。このときもやはりマスコミ・ミニコミといいますが、長野の方には『週刊長野』というようなものがあるわけですが、そこへ広告をお願いしたわけです。そうしまして31名、新しく見えられた方が13名あったわけです。

その後Ｄのところですが、これは諏訪です。18名希望のところを17名あったと。新しく出た方が９名であったと。

ついでに、最後のところで２月２日にやりました、これは松本、教養部であったわけですが、39名のところ25名の出席で、４名新しい方が見えられた。

結論的に言いますと、３回以上の全部５回出たという方がお１人おられたわけです。我々としては感激するわけなのですが、最後に松本で調べさせてもらった結果、３回以上出られた方はこういうＰＲが余り有効でなかったというお話なのです。

それで、１、２回受講したと、スクーリングに出たという方は、例えば11名ぐらい有効だったと書きますと、全部で25名出席してアンケートを出してくださった方が18名いるわけなのですが、そのうち11名の方が１、２回出席だと有効、そして２、３名でしたか、余り役に立ってないというような答えを出しておられます。ですから、そういう１、２回というと、そういうマスコミ・ミニコミでＰＲが有効であると、これは当たり前の結果と言えば当たり前のことですけれども、そういうような結果が得られるということです。

以上です。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

２つのテーマをお２人が先生から大変駆け足でお話しいただきました。

また、後でお話いただくことにいたします。

それでは、第１部の最後になりますが、名古屋大学の今津先生お願いします。

○名古屋大学（今津孝次郎教育学部助教授）

名古屋大学の今津です。

袋詰めの中の資料に４枚つづりのプリントがあるかと思います。表題は大学・社会教育機関・放送局によるテレビ放送公開講座の「生涯教育ネットワーク」化というのがございます。

実は、これをきょうはお話ししたいわけです、時間が限られておりますので、文章化したの

で補っていただきたいと思いますが、まず、ＯＨＰをごらんいただきたいと思いますけれども、私の話は今の信州大学のスクーリングのあり方についてのご提案がございましたけれども、それと昨日第１セッションで北海道大学さん、北海道放送さんがおやりになりました議論に名古屋からも参加をしたいというのが趣旨でございます。

結論から申し上げますと、受講生サービスを高めて、受講生の拡大を図っていくためには、大学と放送局と、そして社会教育機関の３者がネットワーク化されるべきである。放送公開講座というのはネットワークを指すのであって、決して番組そのものとか、あるいは大学で行うスクリーングを指すのではないというのが結論でございます。

これを学習者の立場に立って申し上げますと、地域住民の生涯学習を援助する私たちなりの生涯教育ネットワークがどういうふうにして可能かということで、昨日の第１セッションの内容と重なってくるということでございます。

まず、ＯＨＰをごらんいただきまして、これは昨年来、私、キーピクチャーという概念を提案させていただいているのですが、キーワードならぬキーピクチャー、私の提案のキーになる図でございます。キーワードでいえばネットワークがキーワードで、キーピクチャーでいいますと前の単純な図ですが、こういうことになるだろうと思います。

それで、要するに大学と放送局と社会教育機関がどのように役割分担をしながらネットワーク化できるのかということだろうと思います。

私たちは名古屋でもそうでしたけれども、今までどうしても大学の枠内、放送局の枠内だけでとどまるきらいがございまして、後でも申し上げますが、スクーリングがやや頭打ちでございます。これを打破していくためには、どうしても社会教育機関と結びつく必要がある。それがまた、観点を変えますと、生涯学習の時代、学びの時代の私たちのサービスのあり方ではないかということであります。

さてそこで、お手元の配付させていただきました資料の中にも書かせていただきましたが、お手元の資料では４ページ目になりますけれども、昨年、我々は「食」、食べるということにつきましてテレビ講座を制作いたしまして放送いたしました。これを用いた名古屋市に市立の生涯教育センターというのがございます。社会教育機関でございます。そちらの方で特別講座を開きたいということで、番組を制作いたしました名古屋テレビが後援、そして名古屋大学が協力と、実質こういうような形ですが、そういうような形で３者で特別講座を組んでみたわけであります。

これはそこにも書いてございますように、１つの学習実験でございまして、今後この成果に基づきましてどういう放送利用学習が可能かという１つの手がかりにしたいということだったのですが、10月から12月にかけまして、11回にわたりまして特別講座「食を考える」、これを聞きました。これにつきましては、４回ぐらい大学と放送局と生涯教育センターの方が会合を持ちまして、いろいろ自由なディスカッションを積み重ねていったわけですが、以下の４つほどの点について合意をいたしました。４ページ目の下の方でございます。

まず第１は、この「特別講座」は３者それぞれのニーズにこたえる企画である。ぜひとも積極的にやっていこうということでございます。

２つ目は、今申しましたように、生涯教育センターが主催、名古屋大学と名古屋テレビは後

援または協力という体制をとる。

３つ目、基本的には「放送利用学習」、これはこれまでＮＨＫの「お母さんの勉強室」であるとか「中学生日記」を使いました放送利用学習が全国でも盛んでございますけれども、こういう放送利用学習の方法を採用いたしまして、まず毎回45分の番組を視聴した後、残りの75分につきまして番組をつくりました担当の講師を中心にして、例えば補足の講義でもいいし、あるいは番組とは全く別の講義でもいいでしょうし、それから質疑応答を中心にしてやってもいいでしょうし、それから、あるいはシンポジウムとかパネルディスカッションをやってもいいということであります。実は、私はちょっとパネルディスカッションというのを試みてみたのですが、とにかく担当の先生がお好きな形を選んで講座を展開していく。

４つ目、これは学習実験でございまして、当然これは調査研究でございますから、受講生は担当講師に対するアンケートを初め、各市のデータを収集するとともに、「学習プログラム」としてどういうふうな定式化が可能かを検討していきたいということでございます。

具体的には、資料の一番最後のところに添付してございますが、名古屋市生涯教育センターの名前で、これは市民大学の講座がございまして、その中の特別枠ということで、名古屋市民大学特別講座として放送利用学習を展開したわけであります。

最後に添付しましたこの資料は、ビラでございます。いささかちょっと味気なくて、もっと広報活動はさきほどの信州大学の方ではございませんが、もっとビジュアルに工夫する必要があるかと思うのですが、こういう形で呼びかけたわけであります。

さて、その中身がどうであったかということなのですが、２枚目のＯＨＰのシートをちょっとごらんいただきたいと思います。

これは大学のキャンパスで行っておりますスクーリングとちょっと比較をしてみたわけですけれども、スクーリングは４回しか開きようがないわけです。それに対しまして、今回の社会教育機関、市の生涯教育センターを使った特別講座は11回開くことができました。時間帯はスクーリングは夜間であります。夕方から夜にかけてですが、教育センターの方は午前中ということで、当然参加される層が変わってまいります。

それから、ビデオ視聴なのですが、スクーリングでは時間外に出してあります。というのは、次にありますように、講師が３人から５人という大勢でございますので、ビデオ視聴をする時間がないので、別室で別の時間帯でまずビデオを見ていただいて、ただ実質それほど多くの方が見られるわけではございません。

ところが、特別講座の場合は時間がたっぷりございますので、まず45分の番組を見ていただく、ほとんどの方がごらんいただきました。後のアンケートの結果によりますと、やっぱり見落としていることが多いので、ぜひこのビデオ視聴は必要であるとか、それからぼーっと見ていたので、もう１度確認するために、やはりこの特別講座の会場でまずビデオを見るというのは重要だという回答が大多数でございました。

内容ですが、スクーリングの方はやっぱり時間的な都合があって、せいぜい補説、あるいは質疑の幾つかに答えるだけで終わってしまいました。ところが、社会教育機関の方は、生涯教育センターの方では、講義ができますし、補説もできるし、質疑応答ができるし、パネルディスカッションも可能であるということで、多彩なプログラムが組めるという有利な点がござい

ます。

さて、こういうことで受講生へのどういう人たちが集まってきていただいたかということですが、３枚目のシートをごらんいただきたいと思います。

スクーリングの方は225名ということで、例年ですと180名から190名ですから、今回「食」という、食べるというテーマでやったものですから、ちょっと例年より数が多かったわけです。それに対しまして、開設時間の問題なのでしょうか、午前中だというふうなことがあったのか、あるいは広報、ＰＲ不足だったのでしょうか、75名というふうに、特別講座の方は予想よりやや少なかった。ところが、おもしろいのは、スクーリングの方の平均出席率というのはそれほど高くありません、31.8％です。ところが、生涯教育センターの方は、ほとんどの方が大体出席されていまして、70.5％。この理由は、まず在住者、これは名古屋市内の方がほとんど、ところが、大学のスクーリングは、非常に広域化しておりまして、市外の方の方が過半数を占めているということです。したがって、遠くから大学のキャンパスまでやってこないといけないということで、どうしても欠席者が多くなるのです。ここに皆欠席者が半数近い、ほとんどの方はテキストを入手されるだけで、ほとんどスクーリングに来られないという状況であります。

こういう結果を見ましても、大学のキャンパス内で行うスクーリングは、やっぱり限界に達しているというふうに我々判断いたしておりまして、これはやっぱり地域に出かけていく以外にないということになりますと、名古屋の都市部におきましても、やっぱりいろいろな社会教育からのご協力を仰がないといけないということだろうと思います。

ということで、生涯教育センターの方は11回全部欠席された方はわずか３名であったということで、スクーリングの壁を逆にくっきり浮き上がらせてくれたということになったと思います。

さて、幾つかアンケートを行いましたので、その結果をちょっとごらんいただきたい。４枚目のシールをお願いいたします。

これは、実はまだ到着分だけなのですが、毎年やっておりますアンケートでスクーリングを効果的にするためにどうしたらいいかということ、２項目選択してもらったもので、まだ全部集まっているわけではありませんが、数が少ないものですから実数で示しました。

それからもう１つは、これは放送教育関係センターの若松先生がスクーリングの視察に来られたときに、会場で若松先生がおやりになったデータをちょっとおかりいたしまして、スクーリングの会場での調査です。

したがって、こちらはスクーリングに参加されている方の意識。こちらはスクーリングに行けない人も入っております。

ここでおもしろいのは、スクーリングを効果的にするために、その場所ですが、名古屋大学以外の場所で行ってほしいというのが数少ないですが、一番トップであります。ところが、スクーリングにいらっしゃった方の意識というのは、圧倒的に遠くてもいいと、やはり大学など学習の雰囲気に富む所がいいのだということで、大分無理して来られている。

ここで、つまり放送公開講座に向けての地域住民の態度には２つの層があって、１つはやはりテーマについて学びたいという層と、もう１つはテーマは、極端に言うとどうでもいいので、というとちょっと語弊がありますが、大学に行って、とにかく学問の雰囲気を知りたい。テレ

ビで登場される先生方のお顔を拝見して、話を直接聞きたいという層と、やはり２つの層に分かれるわけです。いろいろな方がいらっしゃるわけで、いろいろな方が学習しやすいように、とにかく遠くても大学キャンパスへ行って知的雰囲気を味わいたいというのも１つの重要なことだろうと思いますが、そういう方々だけではない。やはり近くでスクーリングをやってほしいということが、都市部でもあるわけでございます。そこで、やはりネットワーク化ということを考えないといけないということでございます。

では、もう１度最初の第１番目のシートをごらんいただきたいと思います。

これはきょう私のキーピクチャーなのですが、これは実はきょうの素材はテレビを中心といたしましたが、ラジオも同じことでございまして、テレビネットワーク化にどういう貢献ができるか。社会教育機関は地域住民に一番近いところにいて、学習のノウハウを積み重ねているところです。そういうところがどういう貢献ができるかということになるかと思います。

最後に、テレビとラジオ両方とも含めまして、特に番組制作の立場からネットワーク化にいかなる貢献ができるだろうかという、そこらあたりのプランにつきまして、アイデアにつきまして、名古屋テレビの方と、それから東海ラジオの方と、海老名さん、そして伊藤さんがいらっしゃっていますので、最後に一言ずつ補足をしていただきたいと思います。

○名古屋テレビ放送（海老名敏宏報道制作本部制作部主事）

名古屋テレビの海老名でございます。

生涯学習を目指した人たちにとって、放送局としてどのような形でネットワークができるかということについては、いささか難しい反省点を踏まえながらご提案させていただきますけれども、実際に名古屋テレビとしまして、どれだけバックアップできるかということについては、実際のところ番組制作をするだけで手いっぱいで、募集告知、募集プロモーション活動、あるいはフォロープロモーションに関しましては、今まで力が全く発揮できなかったということが現実の問題です。

しかしながら、実際民放である以上、視聴者をたくさんつかまえながら、視聴者層の拡大を図っていくことが我々放送局の使命でもありますし、民放としては視聴率を上げていくことも大きな使命の１つですから、実際に今年度、３月いっぱいの名大講座の視聴率は、朝７時から45分間放送をいたしましたが、平均で1.6％か２％の間で、そんなものだろうと、名古屋大の放送公開講座に限っては、民放でありながら視聴率は全く関係ない番組であるということで、我々制作スタッフも思っていたのですが、実際のところ、ふたを開けてみると、この数字というのは割と並びの中でトップクラスをとっていたということは、もう少し我々が積極的にプロモーション活動をしていけばどんどん視聴者層、あるいは受講者層を広める可能性があると。

そういうところで、今年はもっと積極的にプロモーション活動の方法なり、そこら辺をもう少し検討課題として取り組んでいきたいと、そう思っております。

以上です。

○東海ラジオ放送（伊藤英太郎制作局長待遇）

既にベルが鳴っておりますので、本当に簡単に申し上げます。

常々大学の先生方に一生懸命やっていただいて、放送１回きりではもったいないということを思っておりましたので、今年は初めてテレビの方での校外でのスクーリングをなさったとい

うことで、非常にうらやましく思っております。

実施に当たりましては、やはり私どもとしては放送で呼びかけるということ。そのほかに、大学サイドのことになるかもしれませんが、ポスターをお刷りになる場合に、あなたのまちでもスクーリングをやりますというような字句を織り込んでいただくというようなこともいいのではないかと思います。それから、あとはもうこれはどぶ板作戦と申しますか、教育委員会なり、公民館なり、実際に働きかけると、私ども番組でいろいろお世話になっているところがいっぱいありますので、そういう人間的なつながりみたいなものもございますから、そういうところへ働きかけるということで、スクーリングを展開する手だてをつくると、取っかかりをつくるということができるかと思います。

実際やるに当たりましては、講師の先生に対する謝礼とか、いろいろあるのですが、私が思いますのは、スクーリングをいろいろなところでやっていただくということは、生涯学習教育の一助になるということはもちろんでございますけれども、私どもにとっては大変な番組のＰＲになるというメリットがございます。これは放送公開講座を定着させるという意味で、非常に大きな意味があると思います。

それで、１つ考えたことがございますが、きのう北海道が大変広域だということをおっしゃいましたのですが、私どもの放送局も北は飛騨の高山、神岡あたりから尾鷲、熊野、それから南は豊橋あたりまで中継局を持っておりまして、非常に広域な地域でこの番組を聞いていただいております。

そのようなところは13回なり18回というスクーリングをやるわけにはいきませんが、例えばそのうちの１回だけもいい、名古屋大学放送公開講座でやった先生が来て、あの１回分についてのスクーリングがありますよということで、例えば高山へ名古屋大学の先生に１人行っていただいて、そのときにテキストを配布して、このテキストの問題も出てくると思いますが、テキストの購入方法、１回だけでもいい、おやりになれば、ああ東海ラジオではそういういい番組をやっているのかと。では次聞いてみようということに広がっていくと思うのです。ですから、私１回でもいい、僻地という言葉はよくないかもしれませんが、１つずつどぶ板作戦でやっていってはどうかと思います。

以上です。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

ちょっと時間が少しずつ押してまいりましたけれども、今から15分間ほどご討論をいただきたいと思います。

昨日の懇親会のときにごあいさつがありました、皆様ご存じかと思いますが、改めてご紹介がてら、きょうは放送大学の齋藤理事がお見えになっていらっしゃいます。こういう会も初めてでございますので、ご紹介を兼ねまして、今までのご報告についてのご意見とか、ご質問等ございましたら。

○放送大学（齋藤諦淳理事）

せっかくの機会を与えられましたので、ごあいさつというよりも一言だけ質問をさせていただきたいのでございます。

全体を通じて共通しているように思うのですけれども、先生方なり、あるいは放送局の方でどういうふうにお考えか、要するに対象をどういうふうに考えておられるのかということについて、どなたからでも結構ですがコメントいただければありがたいわけでございます。

ただ、例えば名古屋大学の今津先生が最後におっしゃっていましたように、いろいろな方がいるというのが、多分その答えではないだろうかと、こういうふうに思うわけでありますけれども、ただ広報するにしても、あるいはテキストをつくるにしても、あるいは30分番組をつくるにしても、そういうふうなことで対象を一体どういうふうに絞るかということが一番大きな問題ではないか。それが私どもの放送大学が、日夜一番悩んでいる問題でもあるわけでございまして、その辺についてのどなたからかご感触いただければありがたい。

その質問の裏側には、反対の聞き方をすれば、通常の伝統的な大学の授業としてやっておられる、それと断続しているのか、あるいはずっとつながっているのか、あるいは完全に断絶しているのか、その辺のところについてのご感触もお聞かせいただければありがたいと、こういうふうに思っていますが、ひとつよろしくお願いします。

○司会（加藤）

これはちょっと大学を特定することはできませんですね。

○放送大学（齋藤）

そうですね。

もしそれでしたら、東北大学の萩原先生、広報の焦点をどう絞っていただいているのか。

それから、特に新潟の対間局長のところで、30分番組、若い人はどうも45分がいいような感じ、あるいは高校は先生なんか45分がいいような感じがありましたが、その辺のところ。

○司会（加藤）

ちょっと私なりにもうちょっと普遍化して問題を絞らせていただきますと、これは全大学共通だと思うのですけれども、対象になっている学生のイメージ、年齢がどのくらいで、どんな職業の人で、どんな学歴といいますか、今までの学習歴がある人か、そんなイメージが恐らく対象者ということの中のイメージ的には含まれると思うのですけれども、今、齋藤理事の方から大学を特定していただきましたので、突然でございますけれども、萩原先生と石田先生、簡単にそれぞれお話しいただけますでしょうか。

○東北大学（萩原）

東北大学がご指名でございますので、今の問題について、私どもの考え方をご披露したいと思いますが、東北大学、先ほど申し上げましたように、既に15年ぐらいの経験があるわけです。

その間、毎年のようにこの問題は議論し続けているわけです。いろいろ揺れ動いたりもしているのですが、ただ、そういう中で、一番最初のころは、やはり我々は高卒で切るか、あるいは教養部のレベルで切るかというところで、一番最初のころにはかなり深い議論をしたことがございます。

大学公開講座、大学開放講座というような、そういうような名前からして、当初は、やはり教養部大学の学部に入ってくる前ぐらいのところでつくったこともあるわけです。ところが、かなり難しいものになってしまいまして、それ以降、やはり特に放送局側のご要望なんかもありまして、やはり高卒以上というところで、一応我々はイメージをしているわけです。

ただ、今いろいろお話にもありましたように、特に最近ですと、生涯学習、そういうようなこともございますし、高卒以上というような、そういう対象の絞り方も、非常にまた難しさが出てきているようでございまして、我々としては先ほどの調査とか、いろんなことを踏まえながら、とにかく高卒以上とか、そのようなことは一応のめどでございますが、意外と最近の我々の内部の議論としては、例えば我々は放送講座の受講生の募集のところにはそういう文言を入れているわけでございます。これはやはり外した方がいいのでないかなというようなことが昨年当たりから出てまいりまして、やはり高卒とかというふうに限らずに、特に放送講座の場合には、もっともっとそういう意味では高卒でないような方もかなり入ってきているわけです。

そのようなことも含めまして、やはり今の我々の考え方としては、一般市民というようなところで考えるという。これまた非常にあやふやでございますが、ただその中で先ほどの話にもございましたけれども、とにかく普通の人以上に大変な学習意欲をお持ちの方が中にいるわけです。我々が今のこういう学習社会とか、そのようなことを言われますが、一般の社会の中にずしりとした手ごたえを感じる部分があるわけですが、それが一体どういう人たちなのかというところを、今いろいろな形で模索している。そういう中でまた、今の問題みたいなことについても少しずつ応えていこうかなというようなことを考えているのですが、なかなか答えになったかどうかわかりませんけれども、以上、東北大学の今の現状でございます。

○司会（加藤）

ありがとうございます。

では、石田先生どうぞ。

○新潟大学（石田）

今、東北大学の萩原先生が十分ご苦労なさっていることをおっしゃったので、私どもとその点は変わりないわけでありますけれども、１つだけちょっと別な観点を申し上げたいと思います。

私どももやはり高校卒程度のテキストをつくって、それで番組をつくるということにしておりますけれども、ご承知のとおり、受講生だけが我々の対象ではありませんので、もう１つ大きく一般視聴者というのも考えなければならない。その点をやはり考慮しますと、先ほどもビデオでお見せしましたように、5.6％の視聴を上げておりますので、何万という人たちが見たり聞いたりしていると、そういう人たちにも焦点を合わせてやるというところに難しさがあるのではないかと思います。

いずれにせよ、大学の講義ですから、質を落とさないということで、また苦労もありますけれども、しかし一般の視聴者に対しても十分わかるように整理をすると。そこ主任講師と十分話し合って、放送局の方は努力しているというふうに理解しております。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

予定の時間を、先ほど申し上げましたように、10分ずらしまして、11時までというぐらいにしたいと思います。

コメントをいただく方が３人いらっしゃいます。４つ全体についてということはまいりませんでしょう。特定していただいても結構ですし、全体的なご感想でも結構ですから、また後でもう１度お時間がございますから、それでは、高杉部長。

○コメンテータ（高杉恒夫・放送教育開発センター制作部長）

高杉でございます。

30分番組を撮らせていただいた新潟大学のコメントについて、いろいろ申し上げたいと思うのですが、これは広島のお話がまだ後ほどあるようでございますので、後ほどにさせていただいて、１つ感想だけ、去年来２、３回スクーリングに見学させていただいたことがございます。その感想だけ申し上げたいと思います。

スクーリングにつきましては、きのう来随分お話が出ておりますけれども、去年の12月に信州大学のスクーリングを上田で拝見させていただいて、これは大変な信州大学の画像ネットワークシステムというのですか、非常に各地を回線で結んだ双方向の見事なハードを使ったスクーリングを見せていただいたのですが、大変ハードには関心いたしましたが、ただ、先ほど筒井先生のお話のように出席者がやや少ないということでございましたけれども、お話を聞いてみると、やはりいろいろな企業とか、団体、地方自治体等から２、３人、４、５人と連れ立ってきていらっしゃる方が多かったということで、そういうところにそういうＰＲといいますか、テーマに沿って、ねらい打ちするＰＲといいますか、そういうことが必要ではないかというふうにちょっと感じました。

それから、昨年は香川大学のスクーリングを拝見したのですが、これは300人という大変たくさんの方がお集まりいただいて、これはテーマが「四国の交通と経済」という極めて地域の関心の高いテーマ、しかもタイムリーな、架橋ができたというタイムリーなテーマということで、たくさんの方がお集まりになったということだと思うのです。

両方に共通して、ちょっと大変もったいないと思ったのは、やはりスクーリングそのものが非常に、せっかく面接で双方向でできる会場なのに、やはり先生の講義が中心になってしまって、あるいは信州の場合でも画像があるだけに、テレビを１本丸々見せてという時間で結局とられてしまって質疑応答の時間がほとんどなくなるとか、香川大学の場合は、アンケートを事前にとって、その質問の多いのに答えておられるという形はとっていたのですが、結局は講義になってしまっているということで、スクーリングに何かそういうところで、もちろんいろいろやっていらっしゃるところが多いと思いますけれども、そういう演出といいますか、工夫みたいなものがあったらいかがと思ったわけであります。

とりあえず以上でございます。

○コメンテータ（大橋　力・放送教育開発センター研究開発部教授）

それでは、時間が許す限りということで、まず30分番組について。これは脳にとって、使うメディアによる最適時間というのは恐らく生理的に決まっておるであろうと。私の個人的な考えでは、30分というのは物すごく長い時間ということが１つあります。

それから、シグナルの体系によってこれは変わってくる。例えば、音楽が30分で足りなくなるのは当然で、１曲３分間見ているのと絵を10秒ぐらい見ているのと、実は効果は同じわけですから、そういう点では、むしろ音楽はテレビ向きというような形で、むしろ生理というか、人間のコミュニケーションモードの側から少し科学的にこの辺は詰めた方がいい。

次に、テキストのことについて。２つのメディアが双方的に使われる中で、片方が印刷メディアで大成功している２つの例を挙げておきたいと思います。１つは、映画のプログラム、こ

れは事前と前後という形です。もう１つはレコードのライナーノートでありまして、これは同時的な使用も行われる。こういうレベルに入っていくとおもしろいのではないかと思います。

最後に、スクーリングのあり方について。マルチメディアの教育というのは、教室と教室という限界を破って、例えばたった１人しか教わり手がいなくても、幾らでも知的情報の増殖を図ろうということにありますので、私は個人的にはここにスクーリングを無理やり入れてくるということは、ボトルネック現象を起こすに過ぎないと考えています。ですから、私はメディア利用型の、つまり際限ない知的増殖を図る場合には、スクーリングというものは条件にしないという方が妥当なのではないかという考えを持っているのです。

以上です。

○司会（加藤）

ありがとうございました。

○コメンテータ（井出定利・財団法人民間放送教育協会プロデューサー）

井出でございます。

東北、それから信州の筒井先生、それから今津先生からもＰＲということが出されまして、その地域の認知度ということが萩原先生からいま一つというところが出ていたのですが、私どもも放送局側としては、これは大変関心と、これからの努力のことがあるのですが、ぜひ新聞広告を打っていくということを、センターからもシステムとしてお考えいただいた方がいいのではないかというふうに考えます。

というのは、今スポットを、これはシステムとして打ってはいるのですが、24時間というテレビの場合には、ラジオもそうですが、セグメンテーションで考えますと、主婦とか、午前中の時間帯になりますので、いわゆる社会を支えている一般の男性の人たちへのＰＲはちょっと欠けるかなと思います。その点、新聞広告というのは、認知度としては大変に大きなメディアとしてありますので、その辺が活用されていくシステムとして、ひとつパイプが通ればいいなというふうに、私は感じております。

ただ、放送局側も自助努力をしておりまして、その点で各地区の新聞と協力関係にあって、そこに協力を頼んでいるところが各地区ありますが、新潟放送がその点５回ぐらい打っているのですか、お聞きしておりまして、その辺の影響力は時間があれば、またご発言いただければありがたいと思います。

○司会（加藤）

ありがとうございました。

私からも一言申し上げます。

広報の問題につきましては、私自身も放送大学におりましたときに随分苦労いたしましたので、多少意見はございますが、これはまた後ほどまとめて申し上げます。

30分番組について、大変無茶苦茶な連想を１つ申し上げますけれども、朝の８時15分からＮＨＫの15分ドラマがございます。これが視聴率が物すごく高いのです。それをさらにもうちょっと振り返ってみますと、日本の新聞連載小説というのが、黒岩波香が「万朝報」で始めたのが明治20年代でございますけれども、新聞の連載小説、それからテレビの連続ドラマ、これは非常に安定した読者、視聴者を得るのです。そして、連載したから、これは細切れだというと、

さにあらず、司馬遼太郎さんの作品のかなりの部分は新聞連載からきっちりした小説になっているというようなことを考えますと、１日５分が毎日続いたっていいではないかという、何か時間のモジュールを大学の90分授業に合わせようとするから45分というような時間になるので、この長さというものはもうちょっと融通無碍に考えていいころに来ているのでないかなということを、１つ思いつきとして申し上げます。

第１部を終わります。

10分間コーヒーブレイクで、またあと３校からご提案をいただきます。

どうもありがとうございました。

○総合司会

加藤先生からも今ご案内がございましたけれども、10分間の休憩でございます。

休　憩

○総合司会

加藤先生お願いいたします。

○司会（加藤）

それでは、少し押しましたけれども、あと３大学ございます。

では、広島大学の方、よろしくお願いいたします。

○広島大学（鈴木　充工学部教授）

広島大学の鈴木でございます。

私の方は、今回、いわゆる番組短縮に関するといいますか、30分番組になったときにどのように考えていったらいいのかということをお話しする予定にしていたのですが、予算の関係もありまして、とりあえずは45分番組というものを解析してみて、その上に立った上で30分番組をどういうふうに考えるかということをやってみようというようなことで、これは私がかねがね考えていたのですが、ご承知のように、今までいろいろ話題がありますが、テレビにしろ、ラジオにしろ、これは通常大学で使っている講義なり、あるいはゼミナール等の教育方法とは全然違う、そういう形でのメディアを使った教育であるわけでございますが、我々通常講義というのは毎年繰り返してまいりますので、自分たちの教育効果がどういうものかというのを常に反省しながら、自分自身で講義内容をアジャストしていくと、そういうことは皆さん大学の先生ですと当然行っていると思います。

この放送公開講座に関しましては、大体私ども11学部ございますけれども、もし持ち回りで行っているというような状態になりますと、非常に低い頻度での教育機会しかないわけでございます。

一方、先ほどの新潟大学さんの方からもご報告がありましたけれども、30分番組、これは確かに私も有効な方法だとは思いますが、30分番組になりますと、45分番組よりもより計画的に考えていかなければいけないという側面が出る。これは後ほどお話ししますが、そのような状態が出てくると。そのためには、やはり一番最初にこの公開講座の場合、教科書をつくって、自分の講義のアウトラインを最初に組み立てなければいけないという仕事がありますが、そのときに既にある程度番組の内容というのを理解した上で組み立てていかないと、よりよい教育効果は出ないのではないか。いわゆるその教育方法についての積み上げといいますか、そうい

うものが今まで非常に少なかったのではないかと、そういう反省に立ちまして、やはりこれがいいということは出ないと思いますけれども、標準的な番組としてはどのようなものが考えられるのかというようなことを前もって講師の皆様に知らせるということが必要ではないかということで、今回の解析を試みたわけでございます。

ちなみに、私、建築の方でデザインをやっておりますので、どうしても視覚的に訴えるものに対してある効果というのを考えたくなることがございまして、一応今回、たまたま先年度の放送大学の番組を、これは無作為に科学的な番組と、それから社会学的な番組、それからその中間領域ではないかと思われる番組、この３つを抜き出しまして、それぞれ15編のうちの２と７というのを選びまして、それと広島大学で行われました番組２本というのを、画面構成という側面だけから追ってみまして、分析をしてみたということのご報告でございます。

それで、最後に表がございますけれども、この表がその分析結果でございまして、番組の中の画面が白になっておりますのは、これはいわゆる講師が出ている時間でございます。それから、斜めのハッチが入っておりますのはフリップでございまして、これは字の場合と絵の場合と２つありますけれども、そこまで類別できませんでしたので、１本で通しております。それから写真の利用、ＶＴＲを入れたもの、それからマグネット式の字を追加する方法まで含めまして、いわゆる板書スタイル、黒板を使ったスタイルと、それから実験等の補助道具あるいは模型を使ったものと、そういうものを組み合わせて、どういう構成になっているかということを分析してみた結果でございます。

それで、まず第１に、１は地球の科学ということでの授業でございまして、45分でございますけれども、これはかなり物理学的内容が中心になっているものでございます。それで、非常にフリップをたくさん使っている、25編使っているということで、画面の切りかわりが非常に多い番組でございますけれども、第２講ということで非常に講師が力を入れたのか、ごらんになるとわかると思いますけれども、初めから終わりまで、非常に同じようなリズムでずっと刻まれている。それで、フリップを使いながら、かなり内容が短い、数式１つ、あるいは単純なグラフが入っているようなフリップを使いながら淡々と講義を進められるということで、45分を見事に締めくくっている。これ以上フリップを入れますと、もう大変なことになるのではないかと、そういう番組でございます。

それから、次の２の方は、同じ講師の、全く同じ先生の番組なのですけれども、これは変成岩という岩石の話をなさっておりまして、これは１と全く違いまして、それぞれの部分に相当長い時間を使っております。それで、その中でＶＴＲの部分が３つばかり入っておりますが、これがかなり長く入っておりまして、ＶＴＲが入ったということの影響によって全体に画面の切りかえが少なくなったのか、あるいはこういう物を説明する場合は、画面がある程度長く続かないとだめなのか、その辺が事例が少ないのではっきりいたしませんけれども、同じ先生でもこのようにかなり違った画面構成になっているというのが出ております。

それから、３、４は、これはマーケッティング論ということで、社会学的な方法を使っております。それで、ちょっとこういうことを言っては悪いのですけれども、大分アバウトな講義の感覚が強いわけでございますが、全般に余り切りかえがございません。その中で、３の方でまいりますと、中に板書形式というのが、これは慶應大学の教授の方が黒板を使って説明する

ように切りかえていく、あるいは番組の中でかなり長い時間、10分を超える時間でございますが、そういうのを実社会のインタビューに使っていくということで、これはかなり特異な構成だったのではないかというふうに受けとめております。

それから、次の衣生活概論、これは非常に難しいところだと思ったのですが、その中で特に5が、これは「吾輩は猫である」という小説の単行本を使いまして、その中の漱石の、いわゆる衣服の描写を淡々と語りで聞かせるという調子の講義でございまして、全般に余り切りかえがございません。フリップといいますか、これは主として挿絵をそのまま映しておりまして、それをズーミングやパンニングをしながら見せるということで、淡々と話を進められるということで、この辺がいわゆる画面の中での切りかえが一番少ないタイプではないか。これ以上になりますと、ちょっと間が持たないのではないかというふうに考えられるような講義調のものであったわけでございます。

それで、7と8がうちの大学の方で提供した番組でございますが、ちょっと時間がございませんので結論だけ急ぎますと、これを見ていただくと非常に切りかえが多い。これは、いわゆるそれまでの放送大学の系統というのは講義調であるのに対して、やはり番組制作というのに力点を持っているためではないかと思うのですが、その中で、左半分の始まりの方をちょっと隠して見ていただくとわかると思うのですが、終わりの方になりますと、最初のところとかなりリズムが違ってきている。と申しますのは、やはり40分にかけてあたりからですと、いわゆる最初の構成のままで押し通すのはかなり無理で、この辺が始めから調整含みで仕組まれているのではないかということが出てまいります。

やはり30分番組はいろいろな問題がございますけれども、きちんと構成した場合は、むしろ講師にとっては非常に楽な時間になるのではないか、そういうようなことが考えられる。

それから、大体山が4つから5つくらいになっているのもありますが、3つから4つというのが普通でございまして、これもまた30分にしますと非常に難しい。

ですから、30分番組では1本で完成するというよりは、オープニングとエンディングの時間がありますので、2本1時間というような形で組み上げるというような方法をとられた方がよりいいのではないかというのが、今回の簡単な解析の中での結果でございます。

なお、これは今後とも積み重ねて、いわゆる各放送局の番組を見させていただきまして、さらに成果を上げたいと思っております。

○中国放送（田島明朗ラジオ制作部専任部長）

中国放送の田島でございますが、広島大学の鈴木教授からご提案ございましたけれども、実際に広島大学で30分に移行いたしましたのはラジオの方の番組でございます。ラジオの番組を制作いたしまして、放送を完了いたしましたところから、若干ご報告と提案をさせていただきたいと思います。

30分に移行いたしましたことに伴って、受講生を対象にアンケート調査を実施いたしまして、実はこれを骨子に発表させていただこうかと思いましたのですが、新潟放送さん、それから新潟大学さんの方とダブりますので、多少皆様方のお手元に活字で刷ったものとはほかの提案になると思います。そのあたりご了承よろしくお願いいたします。

放送理念による公開講座の1単位時間の短縮、それから放送回数の変更につきましては、主

にセンターの公開講座研究会専門委員会の方で、これは昭和63年から平成元年にかけて種々検討が行われたやに伺っております。それをもとにして、一部大学で30分の講座を組み立てたのが今年度最初でございます。

30分がいいのか、あるいは45分がいいのか、いろいろご意見がございましたが、いずれにいたしましても、私ども制作サイドは30分であろうと45分であろうと、大学公開講座というタイトルがついておりましても、ある程度楽しく番組を提供できなければいけない、皆さん楽に聞いていただける番組をつくらなければいけない、これが今年の反省でございます。反省と申し上げますのは、今年30分をつくるのに当たりまして、45分をつくるのとほとんど同じ手法で、できるだけ講師のお話を煮詰めるという方法をとりました。見事にかた過ぎる、中身の詰め込み過ぎの番組になったと、大きく反省しております。

それに伴いまして、回数の増加ということが発生いたしました。今年度18回で放送いたしました。この18回という回数は、予算の関係から30分18回というのが固まったのではないかと理解しております。

この放送回数がふえたということにつきまして、聴取者の方からこういう声が上がりました。18回ラジオの講座を全部聞くというのは無理だと。しからばテレビの講座はいかがといいますと、ラジオの場合は番組の機械的な予約録音が非常にしにくいということでございます。

今年びっくりいたしましたのは、大学の方に登録いたしました受講生は大学で再聴取の機会がございますが、それに漏れた方は放送に頼らざるを得ない。局の方に何とかプリントしてもらえないだろうかとテープを持ってお越しの聴取者が随分の数に上りました。

もう1つ、学校で、大学を離れまして、公民館とか、あるいは高等学校、中学校あたりで、この放送講座、既に放送の済んだものがいろいろな教材として使われている。いわば海賊版のテープが非常にたくさん出回っているというのが広島地区、あるいは山口県の一部における実情でございます。このあたり著作権というのは一義的には放送局、大学、製品的には放送センターの方が持っていらっしゃると私は理解しておりますが、このあたり、著作権の方はセンターの方に一元化して持っていただく、差し上げても結構でございます。何とか海賊版と呼ばれないだけの融通性を持ったテープの量をふやした供給ということを検討していただけないだろうか、こういう提案をさせていただきたいと思います。

失礼しました。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

それでは、引き続きまして、今度は四国地区の大学群ですね、高瀬先生よろしくお願いいたします。

○徳島大学（高瀬昭治総合科学部教授）

徳島大学の高瀬でございます。

一応テーマとしましては、「四国地区大学群における輪番制による実施体制の問題点」ということで掲げさせていただきました。

いずれも、今年徳島大学は実施大学という形でやりまして、それに基づく反省点、それに関連した提案ということになるかと思います。四国地区全体の経験ということではないと思いま

すので、その点徳島大学の経験という意味でお聞きいただければと思います。

ご承知のように、四国地区では国立大学の７つの大学が輪番制で実施大学という形で放送を担当し、その大学のある地元の民放局で番組制作という形になっております。７大学ということは、実施大学は７年に１回回ってくるというふうな、完全な輪番制になっております。

一応、今年度の全体の動きを検討するのは四国地区放送大学公開講座の検討委員会というのが各大学から検討委員が出て、その検討委員会というのは年２回行われます。そこで次年度の計画とかという問題が論議されるわけでございます。

一応1993年から２巡といいますか、１クール終わって２回目のクールになるかと思います。そこの階段で、いろいろと問題協議したいと思うのですけれども、現状は、いつでしたか、最初に行われました高知大学の先生がこのシンポジウムで数年前に、高知出身の寺田寅彦さんの言葉を引用されて、四国では放送大学の実施というのは、ちょうど天災は忘れられたころに来るというのと同じように、７年目で大体忘れたころに実施大学が回ってくるというようなことを言われたことがあるのですけれども、そういう意味では７年に１回というのは、もうこれは四国地区ではずっと言われているのですけれども、その前のときの、いわば経験といいましょうか、それがいわゆる蓄積されていかないという問題が１つ残っております。

と同時に、７年に１回ということになりますと、実施大学の方では、どうしても肩に力が入るといいますか、７年に１回だから、とにかく大学で一番やりそうなテーマといいましょうか、テーマの面から申しましても、その大学は得意とするテーマというのが選ばれてきます。

ことし、徳島大学では、そういう意味では生命科学という、「未来をひらく生命科学」というような形で、医学部、工学部、薬学部、その辺のところが中心となった番組をつくりました。

これは言うまでもないことですけれども、四国放送のテレビ制作に当たる地区放送の方には大変ご迷惑をかけたのではないかと思うのですけれども、それぞれ大学の先生というのは専門の領域がございます。生命科学というふうな基礎、応用という形に分類してやったのですけれども、それぞれその内容のトピックスについては、このテーマについてはこの先生がいわばご専門だから、その先生に出ていただきたいということになりますと、延べ人員で13回の番組で26名の先生が出られました。

そういたしますと、テレビ局の方としては、何とか一生懸命その中で絞り込みというのでしょうか、まとめていくのに大変ご苦労されたと思うのですけれども、どうしても番組が45分の番組であっても、内容的には駆け足になってしまうというのでしょうか、そういう点が視聴者の方から、もう少しゆっくりじっくりと聞きたかったのだけれどもというようなご意見が出ております。

逆にラジオの方は、講師の方はお２人という形でかなり厳選したといいますか、そういうテーマだったのですけれども、四国の文学というテーマを取り扱いました。四国地区でどこでも見てもらえなくてはいけないという形で、文学といっても徳島の瀬戸内寂聴さんの話ばかりやっているわけにはいかないわけです。香川へ行けば菊池寛、愛媛の子規とか、必ず四国４県を取り上げますと、結構量的には多いわけです。

最初の計画では、全体としては、これは文学を楽しみながら、文学散歩のスタイルでありたいという形でスタートしていったのでございますけれども、そういう中で各県を一応まんべん

なく取り上げるということになりますと、どうしてもこれは30分で13回の番組でございましたけれども、もう少し聞きたいのにもう30分終わってしまうという、かえって余韻があって次回を楽しむという、次回を期待するという、そういう面ではプラスだったかと思うのですけれども、もう少し聞かせてほしいというふうな、やはりこちらもそういう意見が受講生の方から出てまいりました。

いずれもこれはいわば大学側がそういうテーマを決めて、講師を決めている。それから、四国全域を配慮するというようなことから起こった問題で、これも何回かそういう番組制作を我々が経験していましたら、いわゆる絞り込みという問題はもう少し収縮するかと思うのですけれども、どうしても先ほど申しました７年に１回となりますと、とにかくそれを全部やってしまおうというようなことになりまして、大学側がそういうことを言いますと、局側が余り絞り込むから、これとこれ削って、この先生の分は要らないのではないかということは言えないということがありまして、どうしても番組全体は非常に、よく言えば密度が高い、悪く言えば駆け足というような、そういうスタイルになったかと思います。

そういう、いわば番組の内容とか、そういう問題は、実は四国地区の検討委員会では、それぞれの実施大学に完全に任せっきりという形になっております。したがいまして、そこではよその大学の番組について、今年はこうだったから、もっとこうしたらいいのではないでしょうかという、こういうシンポジウムはその検討委員会ではほとんど行われません。かなりビジネスライクというか、ルーティンの仕事でしか議論できないという形なのですが、そういう点を何とか四国地区で大学でやるとしたら、何か解決する方法はないだろうかという形で、実は今年度から調査の面につきましては、いわばいろいろな大学でいろいろな調査をやるのだけれども、その辺をもう少し共同調査というようなことが一体可能かどうかということも含めて、調査の面では従来の検討委員会以外に調査担当者会議というものを今年度から開くようにいたしました。それによって、もう少し大学群としての特徴を生かしながら、機能的な調整ができるのではないかと期待しております。

そういう意味で、これから少しずついろいろな大学群としてのあり方の内容の検討も始まってくると思います。

そういう意味では、昨日北海道大学さんのご説明ありましたいろいろな広報という問題につきましても、実は大体今年の場合、テレビですと四国地区で900人集まっています。ラジオが大体700人。四国の人口は480万人ぐらいです。兵庫県よりちょっと小さいぐらいだと思うのですけれども、そういう地域でそのくらい集まっておりますので、大体広報の面では市町村の社会教育委員会とか、そういうところにはまだ行っておりません。主として県の教育委員会に任せるという形になっておりますけれども、将来、もっと受講生をふやさなくてはいけないという問題が起これば、市町村への広報活動とか、もう少しきめ細かい広報活動が必要になってくるかと思っております。

そういう点で、ある意味で四国も広域だという点では、第２の問題としてスクーリングの問題があるかと思っております。これは四国４県で、実は７カ所行っております。７カ所スクーリングをやるのですけれども、これは今までの経験とか、今までの経緯からいきまして１回しか行われておりません。１回行われるというのは修了式を兼ねて行うわけです。出席率は大体

受講生の20％ぐらいでございます。

そこで、そういう期間で非常にスクーリングが行われない、しかも最初のモティベーションというか、イノベーションが行われなくてテレビを見てしまって、終わって２、３週間過ぎてから修了式のスクーリングがあるという形でございますので、非常に残念に終わってしまったというような感じがあると思います。これは四国地区としては、何とかこれを複数、最低２回ぐらいやれるようなシステムというか、体制はとれないかどうかということと、次回の検討委員会には問題提起したいと思います。これも予算とか、講師が移動するというような問題で、いろいろ問題はあると思いますけれども、ぜひ行いたいと思います。

それから、そういう意味ではスクーリングが少ないということを何とか補う方法はないかということで、実は徳島県の受講生、これはテレビの場合400人、テレビの受講生に対しましては、ＴＶ講座通信という、こういうＢ５の４ページものの、これはちゃんと印刷したものでございます。これを13回の放送中に４回郵送で送っております。この内容は、この番組に関連した主任講師とか、講師以外のいろいろな意見とか、それから受講生の方からの質問、あるいは番組に対する要望、あるいは生命科学に関連した講義とか、それからほかのメディアの放送はどういうところがあるかとか、あるいは大学祭でこういうテーマをやっておりますよという、そういう講演会とか行事のお知らせ、それからこれに関連した図書の内容紹介、それから最終回の場合は、スクーリングで学習の総仕上げをしましょうと、学習指導のお知らせというふうな、そういうふうなパンフレットをつくっております。

それで、これでどのくらいスクーリングの回数の少ないのがカバーできるかというのを、一応調査しようというのが、今回の調査のテーマにもなっておるのですけれども、こういうＴＶ講座通信という学習補助情報というふうに我々呼んでいるのですけれども、それを出して、そのスクーリングの少ないところをカバーしようと考えております。

それから、これを出版して感じること、あるいはスクーリングの受講生が20％ということで感ずるのですけれども、先ほど受講生の対象はどういうところかという、齋藤理事の方の問題提起もありましたけれども、これはいわば徳島でいいますと、大体これは７割、６割強が短期大学以上の大卒でございます。テレビでいいますと、４年制の大学が大体35％。ですから、我々一般の放送でない、キャンパスでやる公開講座の場合はこんなに高くありません。放送の場合は、意外と高学歴の方が見ているということが言えるのでないかと思います。ラジオの方でも大体６割ぐらいが短期大学卒以上の学歴を持っております。

こういう高学歴者が、ある意味で大学でスクーリングを受けることにどの程度の魅力を持つのかどうかというような問題。昨日から出ておりまして、スクーリングの位置づけといいましょうか、かなりの方がそこにパッショナルなコミュニケーションの場があるというふうなイメージもあると思いますし、それからもう１つ、昨日やはり北海道大学の方が問題提起されました放送公開講座の受講生は強制されたくないという意見がございました。そういうスクーリングに出なくても結構勉強できる高学歴者というのを考えた場合に、スクーリングのあり方というのがどういう意味があるのだろうかという点も若干気になります。

そういう意味では、スクーリングに来られた、四国の場合は平均20％でございますけれども、来なかった80％というのは、一体テレビを見てどういう学習内容というか、学習経験を行った

のかどうか、その辺は調査結果で出てくるかと思いますけれども、そういう意味では、放送という非常に広範というか、幅広いメディアを利用する教育のあり方について、いわゆる従来のスクーリング中心の教育システムでいいのかどうか。もっとそれとは、スクーリングに来ないけれども、かなりの学習効果を上げる人がいるのかもしれないという、その辺への配慮といいましょうか、受講生をある程度幾つかのセグメントに分けて、それぞれが余り群れをつくりたくないといいますか、そういう小集団の受講生というものに対する、どういうふうに評価していくか、彼らに対する配慮をどうしていくかというような問題があるのではないかというふうに、受講生像のもっと細かな分析と学習経験の蓄積といいますか、そういうものがどういう調査の結果、データが出てくるかということを期待している次第でございます。

そういう意味で、全体として、我々のところではどうしても7年に1回というので、肩に力が入ってしまうという、それで終わってしまうと何かほっとしたというような感じがあるかと思いますけれども、何とかしてそういうのをいろいろな大学群としての特徴を生かすような研究会、検討委員会等を、内容をもって充実していきたいというふうに期待しております。

どうも失礼しました。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

次に熊本大学さんお願いいたします。

○熊本放送（本田郁子テレビ局付部長）

熊本放送の制作の本田でございます。

本来、今までずっと大学が報告をして制作者が報告をするという形でございましたけれども、番組をつくる場合でも先が読めないといいますか、意外性というのが意外と番組ではおもしろい演出ということになるわけですが、制作の方からちょっと発表させていただきます。

昨日のセンター長のお話の中でも国立大学、それから私立大学合わせますと、かなりの数の講座が行われているということでございましたが、熊本の場合も今4大学で公開講座が行われていまして、何とその講座の数は、大学公開講座が始まります9月の前から始まっておりますので、50講座以上あるわけです。こういうふうな各大学の講座とこの放送公開講座、どこが違うかというと、やはりラジオ、テレビのメディアを使って放送するということが大いにほかの講座とは違うわけです。

熊本県の場合は、熊本放送も長崎県の島原とか、それから佐賀とか、大変圏域を越えて、広域で見ることができます。ですから、かなり広い、そこで視聴者を予想することができるわけでございます。この広域の中で熊本大学の公開講座としての水準を保ちながら、そして楽しく聞ける番組をつくるという、この3つ今挙げましたけれども、大学の水準を保って楽しく番組を聞くという、これはいつも制作者の悩みの種でして、今回はたまたま「薬用植物、医療を支えるもの」というテレビのこの番組では、このあたりが大変一致することができた番組だと思っております。

きょうはテーマの決定の重要性ということがここの提案になっておりますので、その辺から申しますと、昨日から問題になっております市町村と提携して展開していくためには、やっぱり講座のテーマを決めるということは、とても大事なことになってくるわけです。なぜなら、

大学と放送局側とテーマを決めまして、市町村の住民の方々がそのテーマに対してどんな関心を持っているかという、このところが聴講生を広げていく上でも非常に重要なポイントになってくるのでないかなと思っております。その点では、今年の「薬用植物」は非常にうまくいった例というふうに思っております。

ラジオの方の「日本古典文学における愛の形」、これは先ほど齋藤先生の方から対象をどう絞るかというご質問も出ておりましたけれども、結果的に申しますと、このラジオの方は大学公開講座の聴講生は50代、60代、が一番多かったかと思いますが、40代、50代、60代という感じで、目に見える方々は割とお年寄りなのです。放送局の方で聴取率調査を調べますと、一番多いのがこのテーマでは18歳から24歳ということで、所属は学生ということで、大学公開講座の聴講生と目に見えない視聴者とのこの年齢的な差、だから年寄りは30分の方が聞きやすいという規定で聴講生を見ていると、実は若い人がこの番組を聞いているのだという、そういう落差があるということを調査の結果から発見しました。

それから、昨年度まではスクーリングの会場が市町村へ県なり市なりから、今度はこれこれの大学のスクーリングを引き受けてほしいというふうに指名されるといいますか、そういうふうな形で決められていたわけです。大学の学生部の先生方もお回りになって、余り歓迎されないような状況があったりとか、いろいろあったようでございますが、今年度は市町村のリクエストにこたえて会場を決めるというような状況でスクーリング会場を決められました。

私もスクーリング会場をなるべく行けるところは行っておりますし、必ず大学側と放送局側と各地には２度ずつ足を運んでいるわけでございますが、会場に来ますと、本当に聴講生の反応が生で感じることができるわけです。

今回の「薬用植物」の聴講、スクーリング会場は、海辺の三角とか、山間部の矢部とか、それから水俣病で皆さんよくご存じの水俣市とか、それから熊本市の県立図書館で行われましたけれども、暑いさなかですが、補助イスを出すほど満員の盛況ぶりでした。これなどはテーマというのが全く一致して、非常に歓迎されたということが証明されるのではないかなと思っております。

それから、昨日からいろいろお話を伺っておりまして、各地域の社会教育機関とのネットワークのすばらしさ、北海道大学の例をお聞きして、本当に、これから熊本の地区でもこういうことをどんどん学ばせていただきたいと思いながら聞かせていただきましたが、その中でいろいろ出た中で、これは双方向ということと受講生サービスということが昨日の討議の中で出てまいりまして、実はこれに関してちょっと報告させていただきたいのは、テーマの決定の重要性から外れるかもしれませんが、私どもでラジオの方では昨年が11年目になったわけですけれども、今年12年目ですけれども、初めからスタジオ聴講生という制度をとっておりまして、大学が聴講生を募集する前にスタジオ聴講生を募集しまして、スタジオで生で聴講していただいて、それを収録をする。そして収録が終わった後、１時間ほどいろいろ質問に答えていただいて、スクーリングのような形をとっております。ですから、13回の講座、必ず13回スクーリングがあるという形でラジオの番組をこの11年間そういう形で続けてまいりました。これは双方向の１つの小さな形ではないかなというふうに思っていますし、受講生の１つのサービスになるだろうと思いますし、また大学の聴講生以外にスタジオ聴講生として応募する方がいるわけ

ですから、１つの拡大にもつながるのではないかなと思ってます。

スタジオ聴講生は、今まで水曜日の夜７時から、働く人も参加できるという規定のもとに、ずっと10年間やってまいりまして、１度いらっしゃると先生方にいろいろ質問もできるという魅力もありまして、毎年継続していらっしゃる方が多くて、３分の１ぐらいしか新しいメンバーに変わらないものですから、今度はちょっと変えてみようということで、土曜日の午後にスタジオ聴講生に来ていただいて収録をするという形をとりましたので、半分ぐらいの方が新しい方においでになるような形になりました。

必ず最終回ではアンケートをとります。満足度の調査、それから、どんなテーマがいいかというようなこと、それからどういう学歴であるかとか、年齢はもちろんですけれども、職業とか、いろいろ調査をして、次回のようにしようかということをいつも練るわけでございます。

ちょっとこれはテーマの決定の重要性というところから外れてしまいましたけれども、中島学生部長にフォローをお願いしたいと思います。

○熊本大学（中島最吉学生部長）

時間がございませんので、すぐ説明させていただきます。

私が申し上げたいのは、既に今まで皆さんご発言なさったこととかかわりが深うございますので、簡潔申し上げますと、名古屋大学でキーピクチャーのお話がございました。

平面的に大学側、制作者側、受講生、それから教育委員会、そういう４者の図がございましたけれども、それにテーマの選定、テーマということを考えますと、その平面図の上に立体的にテーマの問題がかかわってくるのではないかと、そのかかわり方について、私ども平成３年度に企画しておりますテレビのテーマのことをお話しして、皆さん方のいろいろご意見を承りたいというのが提案でございます。

なぜ制作者側の方から申し上げ、報告していただいたかと申しますと、今まで、今年の場合がテレビ、ラジオとも非常にうまくいきまして、果たしてどういう意味でうまくいったかといいますと、受講生の方は大体家庭におられるご婦人とか、かなりご年配の自由になられた方とか、そういう方がやはり多いわけでございまして、熊本の場合も同じでございます。

そういう方々が大変うまく食いついてくれたという意味では大変うまくいったわけですけれども、今年の場合にテレビの方のテーマが「計測と制御」という大変難しいテーマでございまして、大ざっぱなことを申しますと、担当講師は主任講師は工学部でございまして、工学部の先生が５名、情報処理センター１名、医学部３名ということで、医学の方は、いわゆる人間の体の制御の問題、そういうものも含めて話されます。もちろん工学部の方はファジーの問題とか出てくるわけでございますけれども、そういたしますと、ずっと今までやってきました対象の受講生とは異なるわけでございます。初めての経験でございまして、他大学ではそういうこともおやりになったことも存じておりますけれども、一体どういうふうにＰＲをし、どういう方法をやるのかということを考えております。

ただ、どちらも同じと思いますけれども、このテーマを決めるときのレベルの問題もございますが、これは私どもの大学と琉球大学の共同研究で授業への活用ということで、後で琉球大学の平山教授の方からご報告が第３セッションであることになっておりますので、そういうことについては省略させていただきますが、そのほかに受講生をどのように特定するかといいま

すか、想定するのかという、この問題が直接かかわってまいりました。

それで、今考えておりますのは、私どもの地域のテクノポリスの中に、私どもの大学で地域共同研究センターというのを設けまして、工学部の教授を所長として併任させておりますが、そこにご参加していただいている企業の中からご協力を得て、若いエンジニアの方を、まずメインの対象として広報をやろうかなというふうに考えております。

それと、今までずっと私どもの方の放送公開講座を見たり聞いたりしてくださった方々には、特に体の制御の問題といいますと、成人病にもかかわりがございますし、神経系統のお話もございますので、そういうところを部分的にでもひとつ見ていただくように、これはやはり市町村の社会教育委員会の方にいろいろご相談して、内情を話してＰＲをさせていただこうかなというふうに考えております。

ただ、結論から申しますと、テーマを、例えば地域のニーズに合わせたり、いろいろ今までずっと見てくださったたくさんの受講生の多数意見に合わせてテーマを決定し、つくるというのは、大変やさしいとまでは言いませんけれども、結果としてはうまくいくことはわかっておるのですけれども、果たしてそれだけでいいのかなということを、今年やりますテーマが少し難しく高度であるということから、改めて考えさせられている状況でございます。

どうぞ、このことについて、ひとつご提案いたしますのでご意見を賜りたいと思います。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

それでは、あと15分ほど質疑応答の時間をつくりたいと思いますけれども、ご質問やご意見ございますでしょうか。

大変貴重なご提案がございました。前の４つの分をも含めてで結構でございますから、どうぞご挙手を願います。

ございませんでしたら、コメンテータの方から……。

どうぞ、舘先生。

○放送教育開発センター（舘　昭研究開発部助教授）

放送教育開発センターの舘でございますが、ご提案いたす意見というよりは、ご提案の中でちょっと事実に関することがありましたので、ご発言させていただきます。

中国放送の田島部長の方から、30分番組のことに関しまして、18回が長過ぎて聞かれないということで、その18回と決まったいきさつの中に、調査研究というより、財政的な面で決まったのでないかというようなご発言があったのですけれども、その辺はちょっと私、調査研究の担当をしておりまして、30分18回というのは、今までの時間が45分の13回、これがトータル585分になります。

それで、30分番組にしたときに、新潟大学さんが20回、あと18回ということで、これは20回の場合600分、それから18回の場合540分でございまして、番組の形を変える際に、トータルの時間というのを一応念頭に入れて、調査研究の方から言いますと、一定量の放送内容というのが番組形態を変えたときにどうなるかと、その観点は抜けていたわけではありませんということを申し上げたかったのです。

それから、そのことは何も585分ではなければいけないとかということでは当然ありません

で、所長がおっしゃられたように、例えば5分ということもありますし、15分ということも……。もちろん15分のときにも、36回、40回やらなければいけないという意味ではありません。事実、高岡の方では30分9回ということでやっていただいています。したがって、調査研究のサイドから言いますと、時間を考えながら番組の形態の形も変えていると、変えた形でいろいろ実験していっているということでございますので、事実だけ申し上げさせていただきました。

○司会（加藤）

ありがとうございました。

ほかにございませんか。

どうぞ。

○放送開発教育センター（多田　方研究開発部教授）

放送教育開発センターの多田でございます。

昨日、第1セッションの最後に高田先生のご意見で、放送利用の大学公開講座はオンエアだけでもいいのでないかというお話がございまして、センターの浜野助教授の方から、それは受講生をどう考えるかということによるということでした。私は、それは正解だと思います。

いずれにしましても、放送教育の教授方法を考える場合には、非常に基本的な視点かと思いまして、と申しますのは、放送利用の大学公開講座とうたわれまして、当初より印刷教材というのがここに伴っているわけでございます。当然のこととして放送のほかに印刷教材というものがそこに存在しているわけでございますが、果たして、それでは印刷教材の果たす役割が一体どういうものだったかということについては議論された方がほとんどないというのが現状かと思います。非常に周辺的に扱われまして、果たして必要なのかどうか、あるいは必要とすれば一体どういうような機能を持つべきかということについて、ほとんど議論をされなかったというのが今までの実情かと思います。

これは同じ放送利用の高等教育でございます放送大学についても同じでございまして、放送大学の場合は、同じと申しますのは、同じような放送授業と、それから印刷教材を使っての勉強になります。スクーリングは別にしまして、この放送と印刷というのが同じウェートで位置づけられています。

しかし、ここの大きな違いは、やはり放送大学の場合は、学生があくまで教育の対象でございまして、単位をとる、あるいは卒業するためには、印刷教材を勉強しなければいけないわけでございます。

しかし、放送利用の大学公開講座の場合、これとちょっと違って、やはりモニターと申します受講生の数百倍、あるいは場合によっては数千倍もおります一般視聴者がまずターゲットになるわけで、この人たちは印刷教材の助けを必ずしも必要としない。いわば見るだけでもある程度理解できるということが前提になるわけでございまして、ただし、印刷教材があった方がより学習内容を確実に定着させる、あるいは深めるというような意味で、あった方がいいというのが印刷教材の役割かと思います。したがいまして、先ほど申し上げた放送大学とは、だいぶ印刷教材の役割、ウェートというものが違ってくるのではないかという気がするわけでございます。

そういう意味で、共同研究のテーマとして、初めて取り上げられまして、きょうは午後から

授業研究では第一人者でいらっしゃる大阪大学の水越先生から、具体的に元年度のラジオ番組につきまして、制作意図、それからその結果の評価ということがご報告いただけるので、大変楽しみにしておりまして、恐らくこれをきっかけに、放送利用のこういう授業の場合の印刷教材のあり方というものについて、これを機会に恐らく研究が重ねられていくということが予想されまして、これ大変楽しみなご報告だと思います。

それで、話がちょっと前置きが長くなりましたが、信州大学の白井先生にちょっとお伺いしたいのですが、信州大学は大阪大学と並びまして、非常にユニークな印刷教材を出していらっしゃいます。

たしか信州大学の場合は始まったのが昭和60年だったかと思いますが、ラジオ、テレビ、両方ともに民間出版社とタイアップしまして、非常に読みやすくて、きれいな印刷教材を出していらっしゃいます。

大阪大学の場合、これは水越先生にも伺いたいと思うのですが、テレビだけが民間出版社とタイアップして出されている。非常にこれもきれいで、よく売れて、評判のいい本のようでございます。私は出版社におりましたもので、でき上がった本の内容とか、あるいは蔵本、その他につきまして、非常に関心がありまして、そういう意味では信州大学、大阪大学というのは、際立っていたわけでございます。

ただし、ある意味では当然でございまして、ちょっと長くなって恐縮なのですが、専門のプロの編集者に、ある程度委ねるわけでございます。したがいまして、やはり大学の先生が委員会の中で集めたものをそのまま印刷に渡すと、そのままではなくてはある程度の編集はなさるわけですけれども、やはり読みやすさという点については、編集者はプロでございますので、そういうものが介在することによって非常によくなっているというのは、ほかの教材と比べますと、非常にはっきりわかるわけでございます。

ただし、ある程度、ある出版社、それぞれ固有の刊行方針を持っておりますし、編集ノウハウを持っておりますので、任せてしまいますと、恐らく固有の問題と申しますか、メディアミックスした場合の印刷メディアの果たすべき固有の機能と申しますか、そういうものについてはある程度埋没してしまって、要するに出版社に任せておけばかなりのものができてしまうということで、そういう研究面ではある意味では埋没するというような、マイナス面が出てくるのではないかというような気もいたします。

したがいまして、最後に白井先生に伺いたいのは、民間の出版社とタイアップする場合に、一体どういう点が一番中心課題になるかということでございます。内容的な問題です。

それから、それはさっき申し上げた出版社には出版社の独自の刊行方針がございまして、出版社にしますと、放送教育あるいは放送授業とタイアップした、その放送に対して余り関心ないと思うのです。でき上がった本が一般性があって売れればいいわけですから、一番のドミナントなメディアである放送、１回限りの放送授業というものに対して余り関心がないと、そういうようなところで、どういうような編集者の両方の言い分と申しますか、委員会の方で考える放送との関係と、それから出版社の方の独自の編集方針というのは、どういうような形で議論されるのか、その辺についてちょっとお話を伺いたいと思います。

○司会（加藤）

では簡潔に。

○信州大学（白井）

簡潔に申し上げます。

実は、信州大学では、先ほどのご発表にございましたように、テレビの方は主に技術者を対象にしてきております。したがって、視聴者を集めるのは経営者協会とか、テクノポリスとか、そういうところをメインにするのと、それから理工系の学生を対象にしてきております。

したがって、テーマを選ぶときに、既にどういうものが、例えば先端技術なら先端技術のどういうものが大事であるかという点で、出版社を含めて、今までの出てきた図書、その他を全部点検しまして、どこで独自性が出るかということを、半年ぐらい前から出版社と打ち合わせをします。そうしますと、最低限このぐらいで、こういう基礎を入れて、このような形にしたら独立の本としても使えますよという、まずそういう線を先に詰めてしまいます。それは主任講師と数人の専門家と出版社との間で打ち合わせをします。

その後、それをもとにして、要するにどこを、どういうふうなものを映像にしていったらよいかと、より本を理解するため、あるいはそれを発展させるためにどうしたらいいかというような点で、今度テレビのディレクターの方とそういった点を決めまして、ですから、映像の役割というのは、やはり割合興味が持てる部分を特に強調して、そのかわり取材なんかをかなり再先端の取材を多くしまして見せていくと。

それで、さらにそういうものの基礎的なこと、これはフリップ、それからテロップを使いましても、なかなか詳しくそういう技術者の方の中には理解できない点がありますので、そういうところを教科書の中に、印刷教材の中に入れていくと。

自然科学ですから、基本的なことをやはり理解していただいて、次の開発のステップですとか、あるいは一般の人でしたら、そういう再先端のところに興味を持っていただくという発展段階と夢を持たせるというようなことで行っております。

○司会（加藤）

どうもありがとうございました。

それでは、コメンテータの方から、またワンポイント批評でもありませんけれども、２、３分ずつ。よろしくどうぞ。

○コメンテータ（高杉）

それでは、時間ございますので、私からは番組のサイズ、長さの問題について、番組論という観点に限ってお話をさせていただければと思いますが、新潟大学・石田先生の方から早速いろんな調査をしていただいた結果を伺い、それから45分番組について、広島の鈴木先生からは、これは実は私どもの方でやらなければいけない調査でありますけれども、大変ユニークな調査をいただきましてありがとうございました。

これを拝見して、私も放送大学の番組、フリップが普通多くて10枚というディレクターの間では言っているのですが、25枚もある番組があったということがわかりまして、そんなことが改めてお恥ずかしいことであります。

それで、30分番組に関してのいろいろお知らせいただいた件につきましては、一応私ども予

想された反応かという、講師側、それから制作者側、受け手の方と、３者の調査につきましては、一応そんな印象を持っております。

昨年の夏に行われた連絡協議会で、どちらかの先生がおっしゃったのですが、45分番組は二息だけれども、30分番組は一息だろうなということをおっしゃって、大変うまい表現をおっしゃったと思うのですが、まさにそのとおりだと思います。伝えたいこと、何か１つのテーマをそれにちょっと枝葉をつけるだけでもすぐ30分になってしまう。先生の方から見れば確かにそういうことだろうと思います。

たしか、研究報告でふだん90分の一般の授業をやっているのを放送で30分にするのは苦痛でもあるというような表現がございましたけれども、講師の側からすればそういうことだろうと思います。

筋道立てて論理展開するには45分、必要な時間かもしれませんけれども、ただ、一方でやはり時間というのは妙なもので、45分は結構長い時間だということも言えると思います。ですから、これまでの例では１つの話の魂では45分待たないのではないかということで、むしろ話を１つ、２つ、３つ加えて、そのあげく詰め込み過ぎ、消化不良になるということも間々あるという。

先ほどの放送大学の例などもその１つの例だろうかと思いますけれども、ただ、受講生の側からすれば、確かに30分の方が一般的には見やすいということはあろうかと思います。

先ほど、いろんな受講生の方のビデオも拝見しましたけれども、昨日の北海道の松本さんでしたか、受講生の方のお話では、北海道は30分やっていないのですが、45分というのは決して長い時間ではないなということをおっしゃって、ただその後、引き続き、つまり45分先生の顔だけあるいは先生の音声だけで45分はちょっときついなと。今年の番組はそうではなかったからよかったというようなこともおっしゃったのですが、私はこの点は、つまり45分持たないから映像を入れるとか、音声をいろいろ効果音とか音楽を入れるというのは、やや本末転倒だと思うのです。やっぱり最終的には、その番組が引きつけるものがあれば、引きつける内容と講師のお話があれば、決して45分は長くない、そうでないと45分は長過ぎるという、当たり前のことかもしれませんが、そんなふうに思います。

まだ、今年初めての、30分というのはトライだと思いますので、いろんな形でこれからも研究を続けていただければというふうに思います。

放送を使った講座というのは、もちろんメディアの特性を、せっかくメディアでやるのですから、メディアの特性を生かしてということで、そのためのプロとして放送局側が専門を生かしてお手伝いするということであろうかと思いますけれども、しかしあくまで主役は、やっぱり私は先生方だろうと思うのです。

研究報告で大変我が意を得たという表現がありましたが、ちょっと２行だけ読ませていただきます。東北放送の杉崎さんなのですけれども、制作者としては、「あえて不遜な表現と承知しながら言わせていただければ、講師その人をも素材の１つと考える。講義内容の切り口、語り口、その人の持つすべてを番組の表情として表すことができたなら、単たるコーヒーブレイク的な手法などは必要ないのである。その方法の模索には近くて遠いものがあるけれども、制作者としての第一の課題になるのではないだろうか。」という大変我が意を得た表現であろう

かと思います。やはり生身の先生、その日の表現とか、いろいろな先生の人柄とか含めた、それこそが最大の最重要なメディアだというふうに、私はやや私見でございますけれども、考えております。

昨日お配りした開発センターの広報紙ＮＡＫＡＤＡＣＨＩに、センターの横山先生が放送講義の心理学というのを書いておられます、その方法で講義をすることの難しさというのを書いておられるのですけれども、まして初めての先生というのは、大変スタジオで、ふだんの教室と違って、生徒のいないところで話されるということに戸惑い、カメラとマイクしかないというところで話されるということに戸惑いがあろうかと思いますけれども、何かやっぱり放送のトークの文法みたいなものがあるのでないかというのが先生の、その辺はわからないけれども、ということを書いておられるのですけれども、これは私どももわかりません。やはりこれは個々の先生方の個性に合わせてトークのための条件づくりをするというのがディレクターの、放送局側の、これも１つの大きな役割だろうと思います。メディアの特性というのですが、いろいろなものを入れるということだけではないのではないかというのが私の考え方でございます。

やや私見を誇張して申し上げたところがあるかもしれませんが、お許しいただいて。

○司会（加藤）

12時半には終えたいと思いますので、２、３分ずつお願いいたします。

○コメンテータ（大橋）

私は、熊本大学、熊本放送からのご提案に大きな感銘を受けました。これについて発言します。

まず、本田さんから市民の知識要求というものに魅力的なテーマでこたえ、そして大成功なさった。

これについてはここまでにして、これでいいかという中島先生からのお話、この私どものプロジェクトは国家の政策に基づいて国家予算を使ってやっているということがありますから、そちらの側からの観点も無視できないと思います。

例えば、産業化社会の中で、国家単位の競合、その結果を左右する戦力としての知識というものが、やはり今無視できないと思うのです。そういう点で、戦略的に効果の高い学問のプロポーションというものを常に我々は確保をしておかなくてはいけない。

そういう点からすると、今、発展途上国で国策的に大学公開というものをほとんど狂奔しているというような事実があるわけです。恐らくそのターゲットというものは、第１のターゲットは、そういう点でうまくやった日本でしょう。ところが、それに対して我が国では、今や、例えば理工科離れというような現象が現実に起こり始めています。これは大変な夢をむさぼり始めている証拠なのでありますけれども、例えばそのような観点からすると、計測と制御というようなテーマが、それだけでいいのかという問題意識の中から浮上したということが、私は本当に感激しているわけです。

それはその名前のとおりに、いかにもこれは戦力に直結しそうだということがありますと同時に、幾つか具体的に言えば、この専門教育を受けた大学卒の専門家であっても、もう３、４年たったら知識が陳腐化していて、新しいものを供給していかないと、もたないという日進月歩を背景にした状況も１つあります。

それからもう１つは、例えば工学の領域で開発されている制御についての知識と、医学生理学の領域で独立して開発されている、これとは全然違うわけですけれども、しかし相互にこれが一体化したときに発揮される効用というのは抜群なものがある。ですから、そういう点で、ディシュプリン・オリエンテッドなものをもう１遍高い次元でまとめていくということ、これによる効果というのがある。それはちゃんと工学部と医学部を軸にしたやり方で、射程距離に入っている、こういうようなところから見ると、これは随分よく考えられていて、これを企業の若いエンジニアの方をターゲットにして展開されるということなのですけれども、実はこのすばらしさとこの姿勢というものが実るかどうかの大きな課題として、こういうふうにして構築されているものを国家レベルで見ると、必要なターゲットをちゃんと組織して、無理にでも見せていかなければならないということが次に出てくるだろうと思うのです。

そういうような観点から、つまり我々が住民サービス、主として知識を注入された対象が、そのままお墓にそれを持っていってしまうというような、ただし社会的にはそのストレス処理等々で大きな効果があるという面も無視できないわけですけれども、そういうような面だけではなくて、潜在的に我々の前に立ちはだかってくるであろう、国家的な競合な相手の中で起こっているようなことにも目を向けながら、この辺の問題をさらに掘り下げていくということも必要ではないかと思いました。

終わります。

○司会（加藤）

ありがとうございました。

では井出さん。お願いします。

○コメンテータ（井出）

30分の番組が今年度から始まりまして、それについて２つほど指摘させていただきたいと思います。

先ほど田島さんから18回は長いという視聴者の声があると聞きましたのですが、逆に13回では、１年のうち３カ月で終わってしまうから、大変物足りないという声もあることはありまして、視聴者の声、どちらにくみするか、大変難しい問題ですけれども、18回が長いという背景には、さっき鈴木先生もちょっと触れておられたのですが、18回の構成が45分13回よりも、真剣に考えないと視聴者に飽きられるのではないかということを考えます。２つのテーマにするとか、１本ならどうやっていくかということは、45分13回の方が難しい問題を含んでいるなというふうに考えます。

それから、長い、たくさん回数が多い方が僕はいいということはありまして、知識度という限定に関しましていいと思います。それは何かというと、映画とテレビの違いは何かと聞かれて、それはテレビは毎回出ていくことだというふうに答えた方がおりまして、大変いい答えだなと思うのですが、とにかく毎回出ていくという習慣性の中での勝負では、回数が多い方が萩原先生が出されました認識度という点では、僕はいいのではないかというふうに単純に考えております。

それから、30分化の問題で編成上、新潟の場合には、毎回１回で現在も放送されているというパターンが１つあります。それから、仙台地区では、年内に終わるということで、後半を週

２回で放送するという、ちょっと変則的な編成になっております。それから、広島さんの場合には、週２回で２カ月ぐらいで終わるのですか、ちょっと編成上30分の問題で３つのパターンが出てきておりまして、変則的に週２回にするという変則的というか、週２回にするということが、視聴者からちょっと負担になるとか、不満の声があるようなので、その辺がこれからちょっと検討送りしていく問題かなというように思っております。

○司会（加藤）

ありがとうございました。

ちょうど12時半です。

私は、主催者を代表いたしまして、きょうの午後のセッションが終わった最後のときに５分か10分お時間をいただいて、全体に感じたことを申し上げるつもりなので、１点だけ申し上げます。

先ほど印刷教材について大変重要なお話が出ましたのですけれども、放送大学の場合には、印刷教材というものは版型は決まっています。体裁も決まっています。

しかし、先生方の中でご存じの方が多いかと存じますが、例えばオーストラリアのディーキンという大学が通信教育、遠隔教育専門の大学でございますが、ここでは例えばコンピューターサイエンスの印刷教材は、後で補完というものが出てくる可能性があるので、全部をバインダーにとじまして、必要なときにはそこに差し込むことができるように。それから、西洋美術史の印刷教材は、ポケットに入る大きさになっております。これはメルボルン美術館の３階のこのコーナーにある絵を見てきなさい、そういうふうにピカソの絵がどこにあって、セザンヌがどこにあるかといったような美術館マップのようなもの、これは美術館に行くときポケットに入れるような小さなルーズリーフ型にして出してある。グラフィックデザインの教科書は、版型を少し大きくいたしまして、上質紙を使っている。

これはディーキンの見事な編集部のあるところでございまして、放送大学にできないような工夫がこの公開講座の印刷教材についてはできるのでなかろうかと、これが第１点です。

それで、第２点はこれに関連いたしますけれども、私は40年間大学に勤めておりますが、書物をつくるのは著者と編集者との、これはパートナーシップの上に成り立つものなので、著者が書いたものを機械的に処理するのが編集者ではない。これはあくまでも仲間なのであります。２人そろって１人前という言い方は好ましいかどうかわかりませんが、それと同じことは、映像音響の制作についても言えるわけです。ディレクターは、私にとってはパートナーである、２人そろって１人前だというつもりで自分でやってまいりました。

といったとりとめのないことで終わりになりますけれども、予定の時間を過ぎてしまいました。よろしくお願いします。

○総合司会

ありがとうございます。

これで第２セッションが終了でございます。

これから、１時半まで昼食タイムでございます。

再開は１時半ということにさせていただきますので、どうぞその時間までにお席の方にはお戻りいただくようにお願いいたします。

こちらのホテルには地下１階と22階にレストランがございます。１階のコーヒーショップにも軽食がございます。そのほか、ホテルの外でのお食事をなさりたいという方につきましては、資料の中に同封いたしてあります案内をごらんいただきたいと思います。

午後の部は１時半再開でございますので、どうぞお間違いないようにお戻りくださいますようお願いいたします。

（参考）第２セッション配付資料

第８回放送利用の大学公開講座シンポジウム

「大学放送公開講座の問題点をめぐって」

番組の製作技法に関する研究

４５分テレビ番組の画面構成法（１）

広島大学　　鈴　木　充

はじめに

大学の「放送による公開講座」はラジオやテレビといったマス・メディアを利用して、大学における教育活動の一部を広く一般の受講希望者に提供するものである。そこに於いては、当然のことながら、より良い教育効果が求められるが、その内容が講義やゼミナールといった、大学に於ける通常の教育方法と異なっているため、講師にとって、番組の製作過程から教育効果を予測することがきわめて難しい。また、１大学が１年に１度講座を開設するという現在の制度下では、１名の教師が番組にかかわる回数は非常に少なく、経験を積むことによって、番組の教育効果を高めるといった自発的効果も期待できない。

そのような現状認識のうえで、放送による教育の効果をより高めるためには、少なくとも番組作成に未経験な講師に対して、基礎的なマニュアルを提供し、メディアの特性の理解を深めた上で、講義内容を構成することが必要であると考えられる。この研究はそのようなマニュアル作成の基礎作業として、番組に対してさまざまな角度からの解析を試みる。

研究の目的と方法

今回の研究は上述した目的を達成するための初めての試みであり、まだ手探りの段階である。ここではとりあえず放送による講座がどのような画面構成を取っているか、試験的に分析してみた。資料としては平成元年度の放送大学の講座から、理科系、社会学系およびその中間と思われる３講座を選び、その第２講と第７講を取り上げ、広島大学の講座２講分との画面構成を比較した。

画面はそこに写し出されているものにより「講師」「フリップ」「写真」「ＶＴＲ」

「板書」模型、実験等の「補助器具」およびタイトル等の「導入」「終了」に分け、それらの画面が写し出されている時間帯を秒単位で記録した。もちろんこれらの映像が流れている間に講師の講義が続いているのであるが、その内容は細かく表示できないので、筆者が大きな流れとしてまとめた内容を上段に示した。

講義内容と画面構成の特徴

■１．及び２．は講師対面形式で１名の講師がテレビ・カメラに正対して講義を進める形式である。１．は特に物理学的な説明であるためか図および数式を書いたフリップが多用され、全体で２５枚に及ぶ。１枚のフリップに要する説明時間は割合に均等であり、あらかじめ講義内容と使用するフリップの整合関係を細かく調整したものと思われる。画面構成は単調であり切換わりが多いが、論点が４項に整理されているため理解しやすい構成になっている。

■２．は１．と同じ講師の講義であるが、画面構成は１．とはかなり異なって、使用するフリップの枚数も少なく、画面の切替も少なくなって、同一画面が長く続く構成になっている。その原因としては、この回の講義が岩石という「物」を扱っているためかもしれない。他の一因はこの講義では岩石の説明のために現地取材を行ったＶＴＲが２場面、約１０分間挟まれていることである。ＶＴＲの画面では講師自身が画面中で解説を行っているが、対面形式の講義でＶＴＲの中から本人の説明が出るのは異質に感じられる。

■３．４．の講義の形態は１．２．と同じ対面形式であるが、経済問題を扱ったためか、フリプ数枚とＶＴＲ２本を使用し、同一の画面が長く続き、画面の切替が少ないという特徴をもつ。しかし、１．では主任講師のスタディオでの講義の後で、他の講師に依頼して、教室の黒板を使った講義を行い、講義室の雰囲気を与えようとした試みや、実社会の事例を会社訪問のインタビュー形式で行うなどの工夫を見せている。１．２．に比べると大学における講義的な色彩が強い。

■５．６．は家政学を扱ったものであるが、講師の「語り」を中心に対面式の講義を

進めるという手法を取っている。したがって、カメラの動き少なく淡々とした「語り」が続くが、その中で多少の小道具を使用することで変化を与えている。その一つは衣服の意味のところで、はパネルに要点を記入したカードを貼り足して行く技法で、講師自身がこの動作をすることにより、固定したフリップの説明やコンピューター画面とは違った講義内容に集中できる動きになっている。5．の後段は夏目漱石の小説の登場人物の服装描写を通して衣服の意味を考えて行くが、小道具として「我輩は猫である」の単行本を使い、その挿絵をズームやパンで見せることによって、講師の淡々とした「語り」に視覚的な変化を与えている。6．も同様に「語り」を中心ににした講義であるが、この篇では科学的な解説のため、フリップが提示される画面が多くなっている。しかし、1．に比べると切替の回数が少なく教室における講義色が強く出されている番組といえる。

■7．8．は平成2年度の広島大学提供の番組である。講義の形式は講師とアナウンサー2名との対談形式を取っている。科学的な内容であるためか1．と同様にフリップや写真資料の使用が多く、画面の切換わりが多くなっているが、対談的な雰囲気をだすため、同一フリップを使用している中でカメラを人物に切換える回数が多く、従って講義的色彩は薄められている。2．の番組の中で注目したいのはアメリカにおけるコレステロール予防の説明に連続して写真を使用した部分であり、スチール写真等を連続使用する技法は放送講座では場合によってはＶＴＲ使用より有効ではないかと考えられる。2本の番組とも講師に人を得た点もあって、見せる番組としては成功しているように思われるが、講師にかなり負担がかかる番組構成になっている。

番組構成上の問題点

本研究はこのようにして画面構成を分析することによって、画面構成技法の効果と有効技法を探ることにあるが、今回の報告はこのような解析が可能か否かを探る試行段階であり、ある程度の結論を得るためには、更に多分野の多数の番組を解析する必要があが、その上で次のような内容に関して提言ができるのではないかと考えている。

（１）４５分番組はどのように構成したらよいか

（２）３０分番組はどのように構成したらよいか

（３）フリップの利用方法と表現例

（４）写真や絵をどのように使うか

（５）模型等小道具の活用例

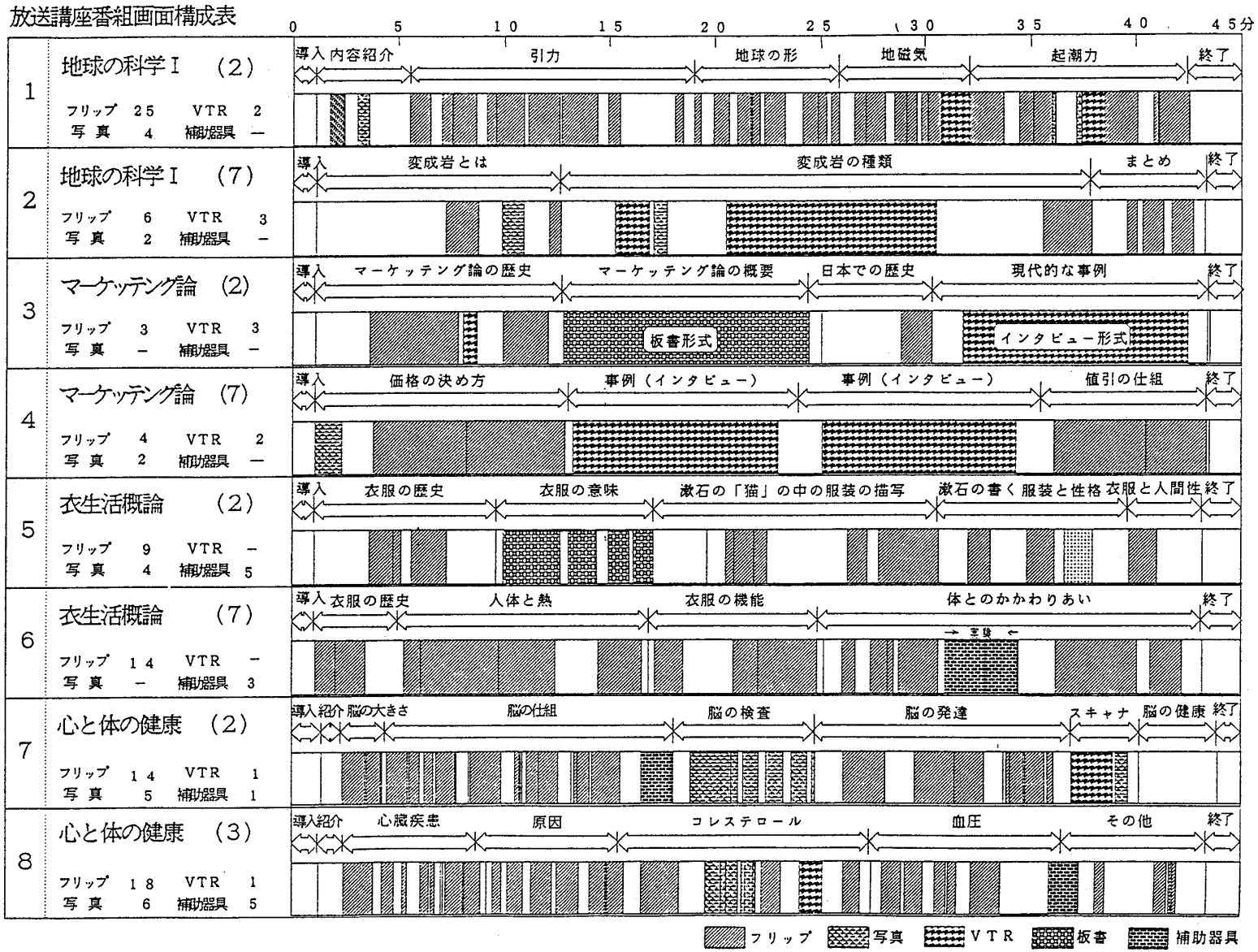
（６）ＶＴＲの利用上の注意

まだ、結論をのべるのには早いが、１例として作成した表から読取れる３０分番組の構成に関する問題点を示すと次のようなことがある。

（１）４５分番組の中で取上げられている説明事項は４項から５項程度にまとめられる。その中で５項以上の山を設けたものは（７と８）画面の切替が早くなりすぎるので、４５分番組では３項から４項の山を設けるのが適当ではないかと思われる。そのような前提で表の３０分の位置で見ると、そこは第３項目の中間に当る。これは３０分番組の場合、内容の山を二つに設定するか三つに設定するかの判断が難しいことを示している。したがって、３０分番組では一つの講義を前後２回にわけ、２度の番組で一つの講義が終了するような工夫が必要ではないかと思われる。

（２）表中の放送大学の事例では、終了まぎはまで、同じようなリズムでの講義がつづけられているが、広島大学の事例では３５分を前後から画面切替が多くなったり、人物画面の時間が長くなるような傾向が見られる。これはテレビ出演に不慣れな講師が当初計画に沿って講義を進められるのは３０分程度までで、最後の１０分程度は計画時点から多分に調整含みにされていると解釈される。番組の３０分化はいろいろな問題を抱えているが、少なくともテレビ出演に不慣れな講師にとっては、３０分番組はかなりの負担減になるものと考えられる。

放送講座番組画面構成表



平成２年度放送利用の大学公開講座調査研究中間報告

別紙資料

1991年２月22日

所　属　琉球大学[1)]，熊本大学[2)]

氏　名　平山清武[1)]，氏家　宏[1)]，國府田佳弘[1)]

池田孝之[1)]

渡辺　学[2)]，山口博子[2)]，久枝隆子[2)]

・調査研究テーマ　大学授業への活用に関する研究

・具体的テーマ　大学放送公開講座教材の大学授業への活用に関する研究
―― 付　大学相互利用の試み ――

表１　調査対象・方法

琉球大学，熊本大学

教材	テレビ：琉球大　沖縄の自然　ー地形と地質　ビデオ，テキスト 熊本大　薬用植物　ビデオ 熊本大　音と人間　ビデオ，テキスト 水と人間　〃　〃 ラジオ：生物生産と私たちの暮らし　テープ，テキスト 思春期の心とからだ　テープ，テキスト
対象	テレビ：琉球大　学生：一般教育，専門教育（計 500名） 熊本大　学生：一般教育，専門教育（計 293名） 山口大　学生：専門教育　（計 120名） ラジオ：琉球大　学生：一般教育，専門教育（計 154名）
方法	講義時間（１００分）利用，平成２年11月～３年１月 テレビ：各回視聴後，要点講義，アンケート回収 ラジオ：各回テープ聴取後，質疑応答

表2　テレビ：沖縄の自然－地形と地質－　　（名）

ケース	講　義　名	使用教材	受講生
1	教養課程　地球の科学	沖縄トラフの陥没	78
2	専門課程　小学校理科教材研究	沖縄の海にもぐる	39
3	専門課程　地史学Ⅱ	大陸の一部であった琉球弧	29
4	専門課程　岩石鉱物学	琉球弧における火山活動	25
5	専門課程　自然地理学	過去の大サンゴ礁　琉球石灰岩	12
6*	専門課程　地史学Ⅱ	半深海下の堆積層・島尻層群	10

＊　熊本大学　学生

図1

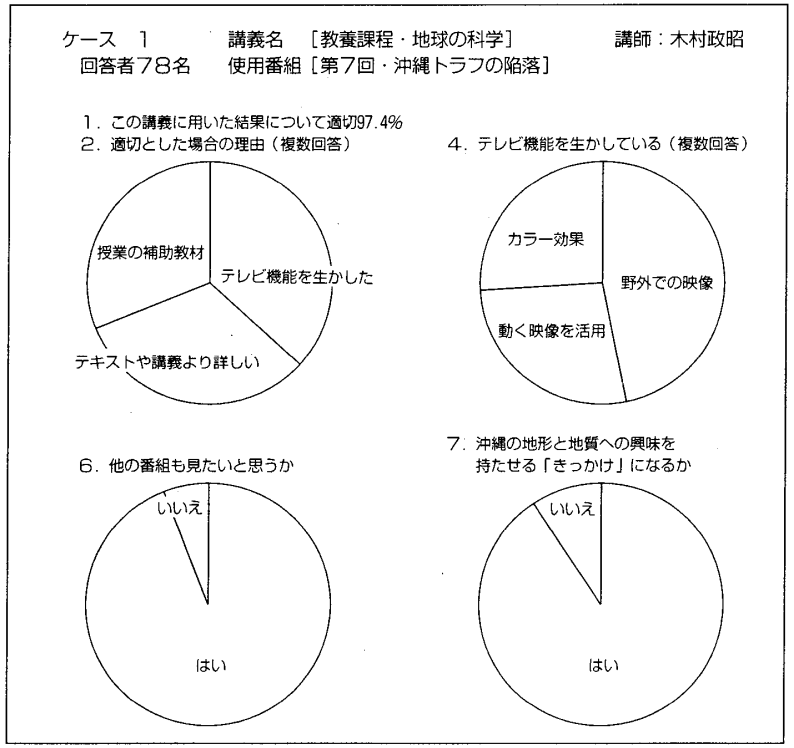


図2

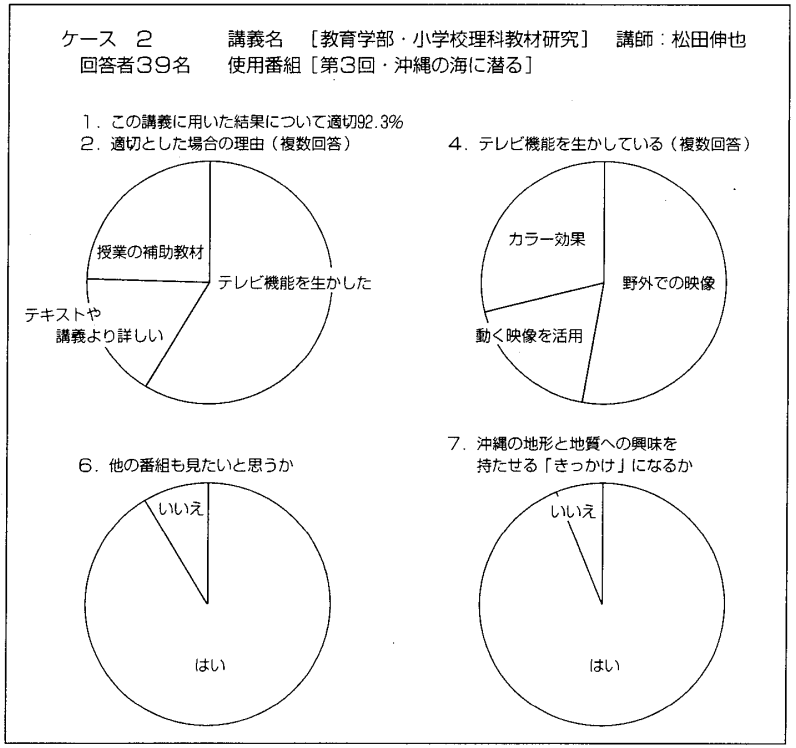


図3

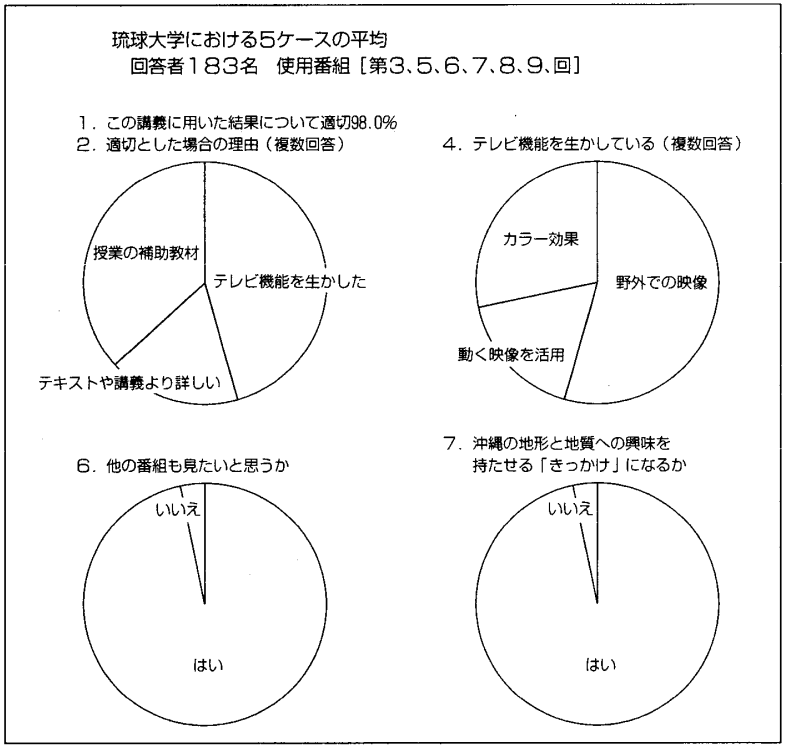


表3　テレビ：放送教材に対する評価，平均値

項目別頻度（%）

	肯定的回答			否定的回答		
	琉球大 業用植物	熊本大 音と人間 水と人間	山口大 音と人間	琉球大 業用植物	熊本大 音と人間 水と人間	山口大 音と人間
内容のレベルは適切だった	61.7	65.0	62.5	9.7	8.5	19.2
教養課程の単位として認定	41.0	58.7	55.8	19.8	13.0	13.3
専門課程の単位として認定	33.9	31.4	71.7	28.7	31.4	5.8
大学の講義として適当	47.6	51.9	75.8	22.4	15.1	5.8

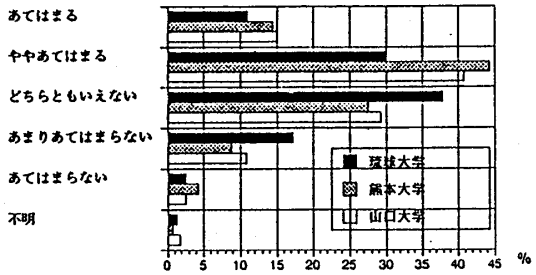


図4　大学の教養課程の単位として認定できる教材であった

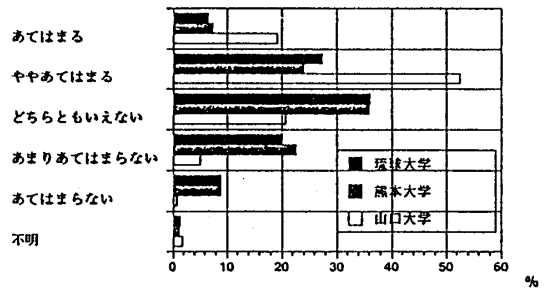


図5　大学の専門課程の単位として認定できる教材であった

表4　ラジオ：放送教材に対する評価，平均値

項目別頻度（%）

	肯定的回答		否定的回答	
	琉球大（思春期の性）	琉球大（思春期のスポーツ）	琉球大（思春期の性）	琉球大（思春期のスポーツ）
内容のレベルは適切だった	66.2	77.5	12.2	3.8
教養課程の単位として認定	40.6	50.1	29.7	26.3
専門課程の単位として認定	13.6	22.6	50.0	38.5
大学の講義として適当	39.2	45.1	35.2	20.0

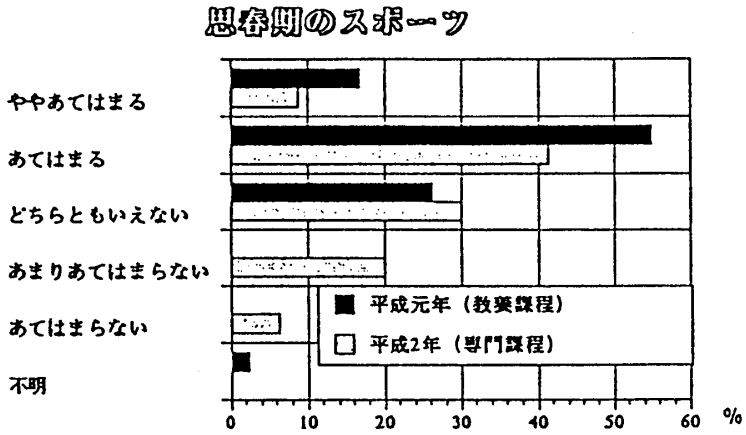


図6　大学の教養課程の単位として認定できる教材であった

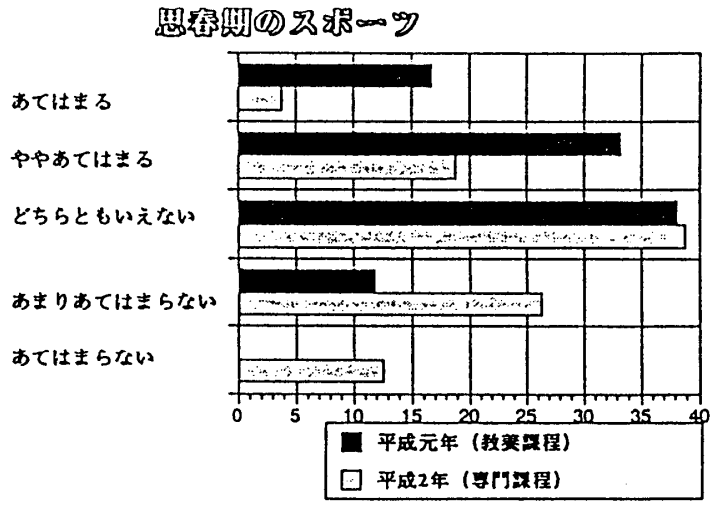


図7　大学の専門課程の単位として認定できる教材であった

研究テーマ

放送講座の認知度と広報活動の課題

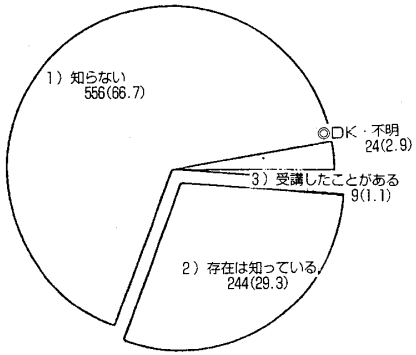
報告者　東北大学　萩原敏朗

東北放送　近田達夫

＜資　料＞

Q41．東北大学には、一般市民向けのさまざまな開放講座を開設するための専門機関として、教育学部に「大学教育開放センター」が設置されていますが、あなたは、このセンターのことをご存知ですか。

図　［センターの認知］

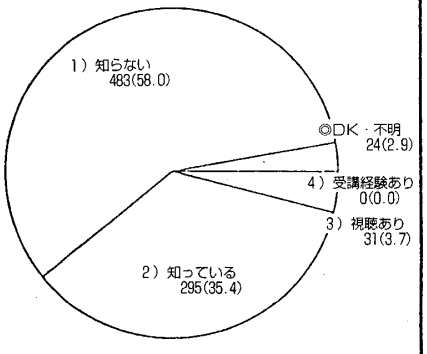


総数 833(100.0)

1．知らない
2．センターが設置されていることは知っている
3．センターの開放講座を受講したことがある

Q42．東北大学の大学教育開放センターは、毎年、東北放送のテレビ・ラジオをつうじて放送による東北大学開放講座を開設しておりますが、あなたは、この放送講座のことをご存知ですか。

図　［放送講座の認知］



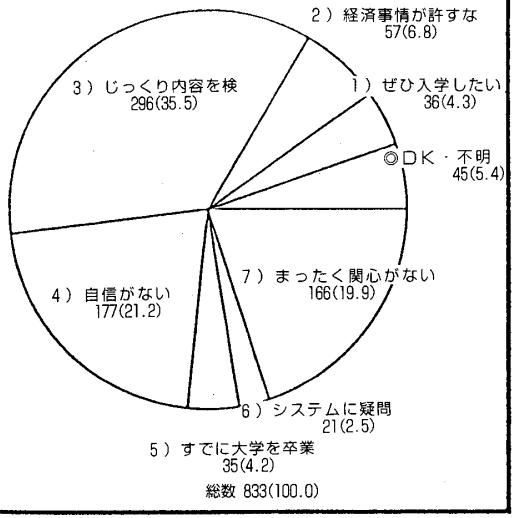
総数 833(100.0)

1．知らない
2．放送講座のことは知っている
3．放送講座を視聴したことはある
4．放送講座の受講生になったことがある
5．D　K・不明

放送大学について知っている方には重複するかと思いますが、この大学は勤労青年や一般社会人に高等教育を受ける機会を与えるために設立されました。この大学に入学した学生は、テレビ・ラジオ番組の視聴や通信教材（テキスト）などで自学自習し、各地域におかれた地域センターで講師から個人指導や講習を受けたりして、４年間で卒業しますが、現在は関東地方居住者のみが対象となっています。

Ｑ４７．もし、宮城県内で、この大学の放送番組が試聴できるようになり、地域センターも置かれたとするなら、あなたはこのようなシステムの大学に入学してみたいと思いますか。（大学卒・大学在学中の方は、大学再入学というかたちで考えてくださって結構です。）

図　放送大学入学希望状況



1．ぜひ入学したい
2．経済事情が許すなら、入学したい
3．入学したい気持ちはあるが、じっくり内容を検討したうえで結論をだす
4．自分の学力や能力に自身がないから、入学したいとは思わない
5．すでに大学を卒業しているから、入学の必要はない
6．大学の教育システムに疑問を感じるから、入学したいとは思わない
7．まったく関心がない
8．Ｄ．Ｋ・不明

『仙台市民意識調査～社会の変化と生涯学習～』
標本設計

調査実施にあたっての諸条件を考案すると、みずから標本数や調査地点数に制約が加わるが、今回の場合、調査日程および能力を勘案して次のような標本設計を行った。

標本抽出法　：層別二段抽出法
標本抽出台帳　：選挙人名簿
標本数　：１２００人
調査地点　：１５地点
標本抽出単位　：第一次抽出単位→投票区
　　第二次抽出単位→個人
層別の方法　：市内８４投票区を、地域特性をコントロールとし層内同質、層間異質になるよう配慮して１５層に分けた。その際、各層の大きさがほぼ同一になるような工夫を同時に施した。したがって、各層の大きさは３３，０００人（４９７，０００人／１５地点）前後になった。

標本精度　：標本設計段階において予想される回収率を７５％とすれば回収標本数は９００人となる。これを実質的な標本数とし、信頼度を９５％として標本誤差を算出すると、層別のプラス効果を加味した場合、最大プラス、マイナス３．０％をみこめばよい。
母集団　：標本割当・層別の状況と調査地点

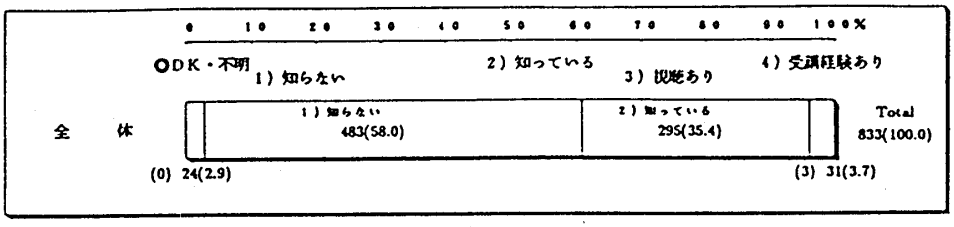
層番号	地区特性	層の大きさ	標本数	調査地点
1	中心業務地区	３１，７７３	８０	東二幼稚園
2	商住地区（西）	３３，５４３	８０	八幡小
3	〃　（北）	３５，６８５	８０	小松島小
4	〃　（東）	３８，０１８	８０	榴ヶ岡小
5	〃　（南東）	３０，４４０	８０	連坊小
6	〃　（南）	３４，１４７	８０	長町小
7	新住宅地区（西）	３２，４１５	８０	八木山南小
8	〃　（北西）	３１，７３１	８０	中山中
9	〃　（北）	３０，９９５	８０	北仙台中
１０	〃　（北東）	３４，４６９	８０	鶴ヶ谷中
１１	〃　（南東）	３３，６１０	８０	南小泉中
１２	農住地区（東）	３０，８１１	８０	中野小
１３	〃　（南東）	３３，８５８	８０	七郷小
１４	〃　（南）	２９，９１１	８０	四郎丸小
１５	〃　（西）	３５，８８３	８０	西多賀中
	全　市	４９７，１５９	１２００	

［調査期間：１０月１８日（日）～２６日（月）］

なお、調査票の回収状況は以下のようであった。

総サンプル数　１２００件
有効回収票　　８３３件（有効回収率：６９．４％）

図　［放送講座の認知×性別］



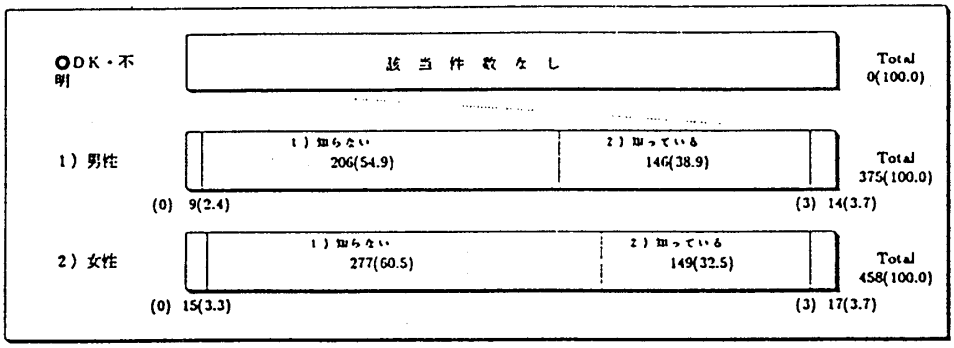
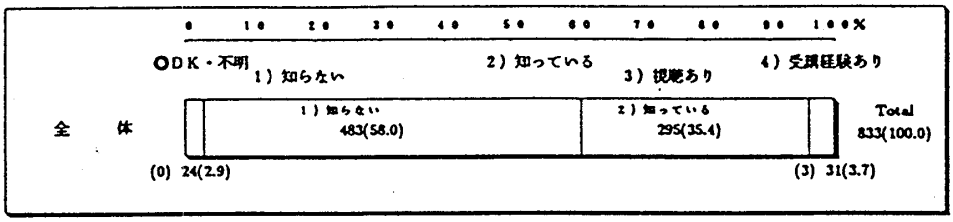


図　［放送講座の認知×年齢別］



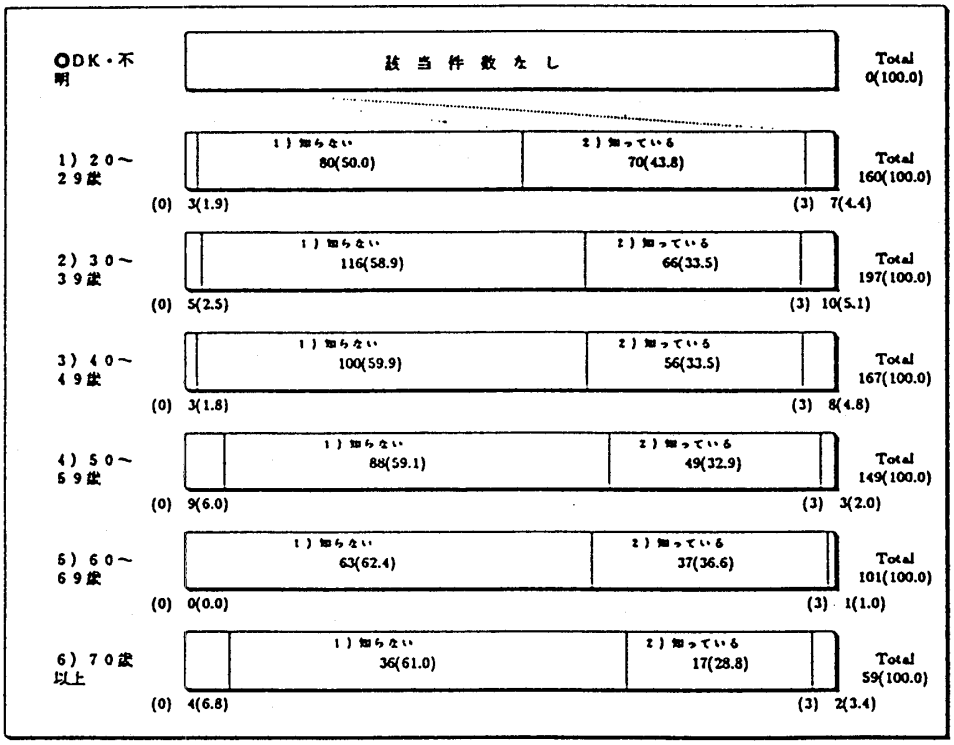
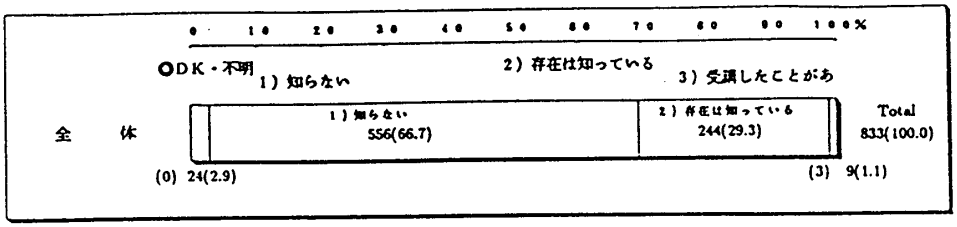


図　［センターの認知×性別］



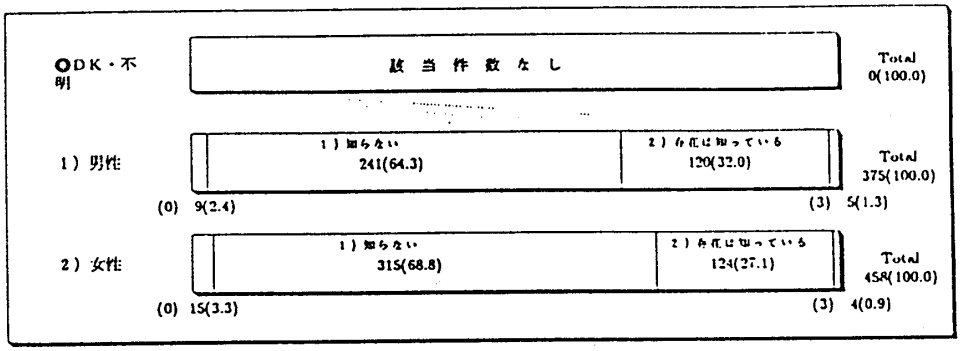
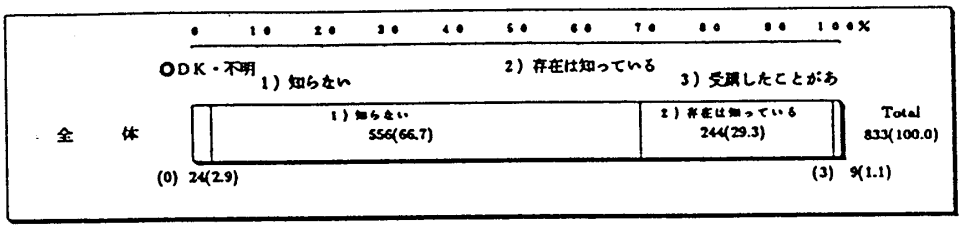


図　［センターの認知×年齢別］



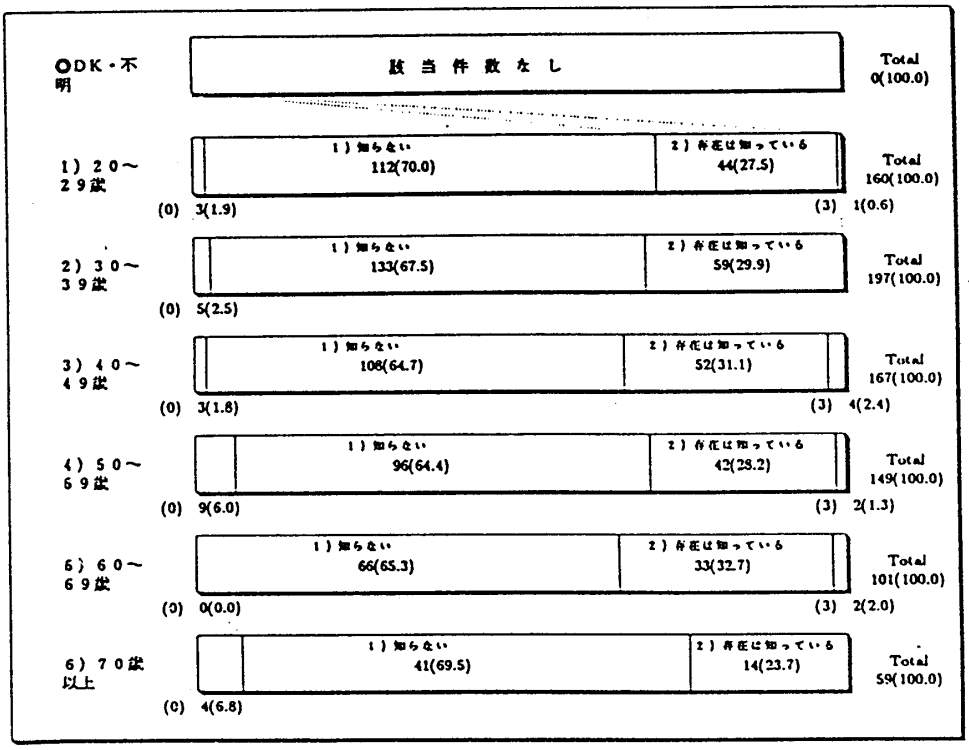
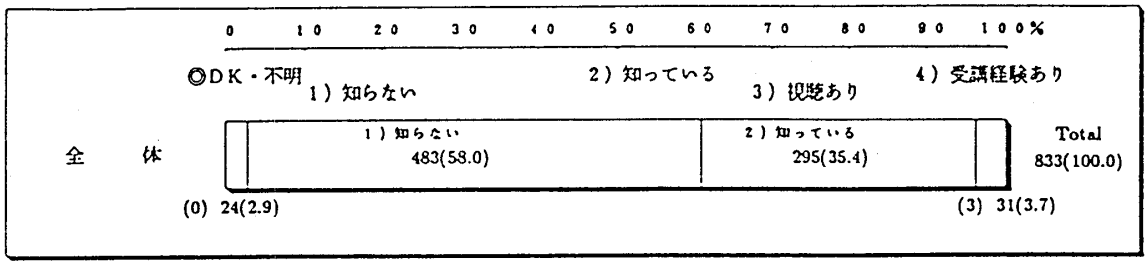


図　［放送講座の認知×最終学歴］



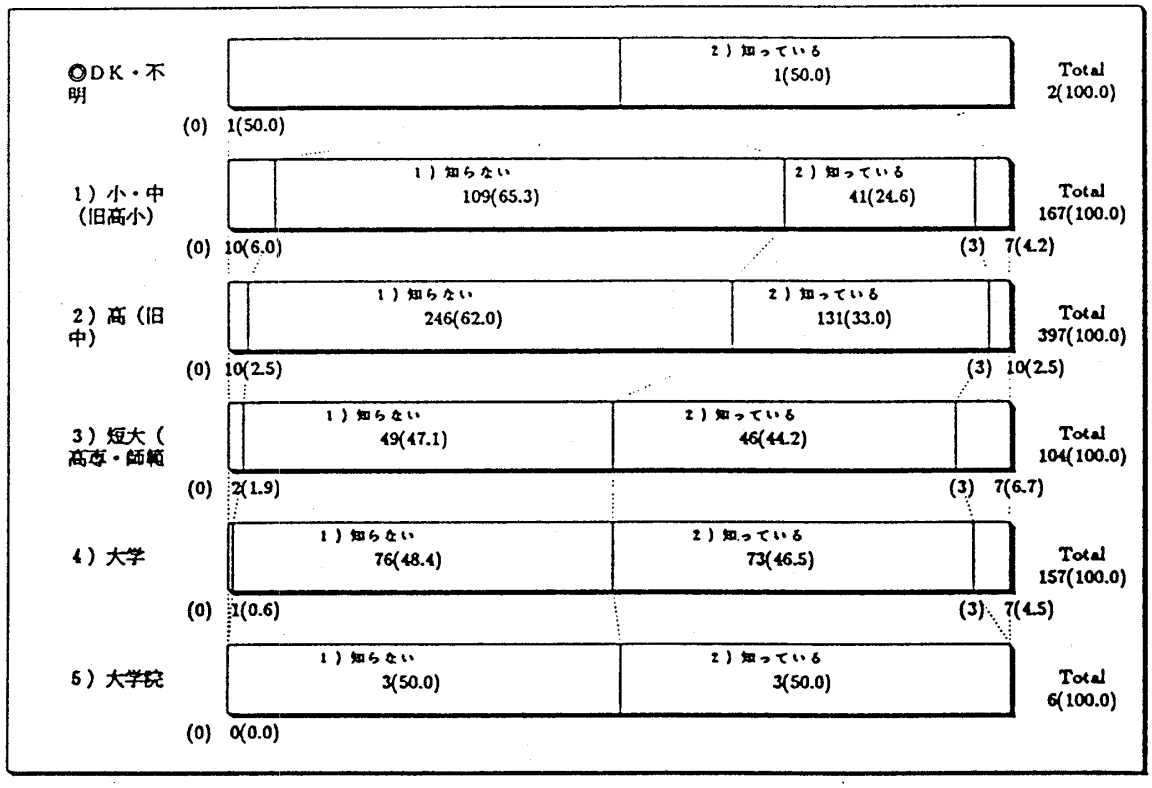


図　［センターの認知×最終学歴］

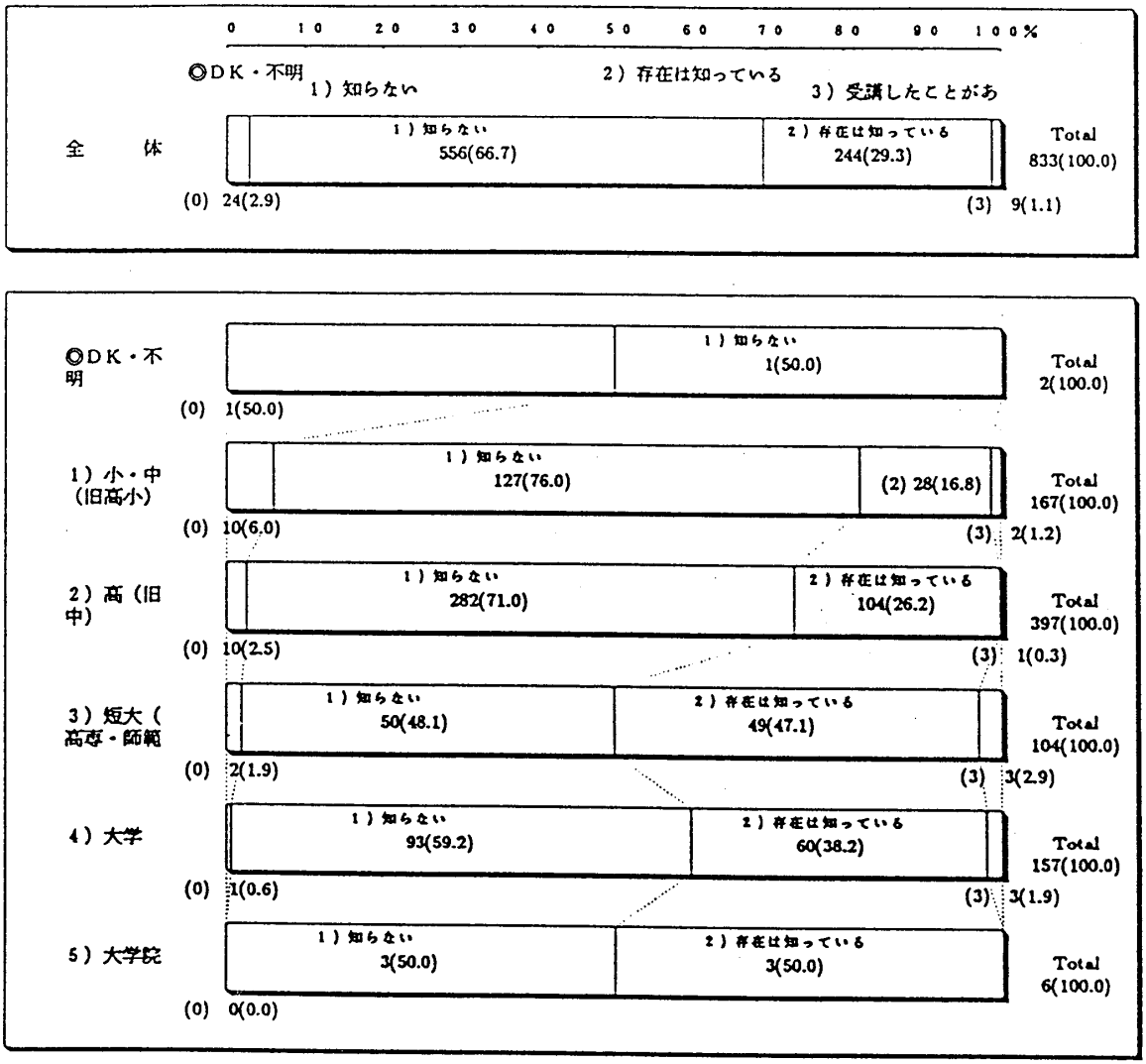


図　［放送講座の認知×職業別］

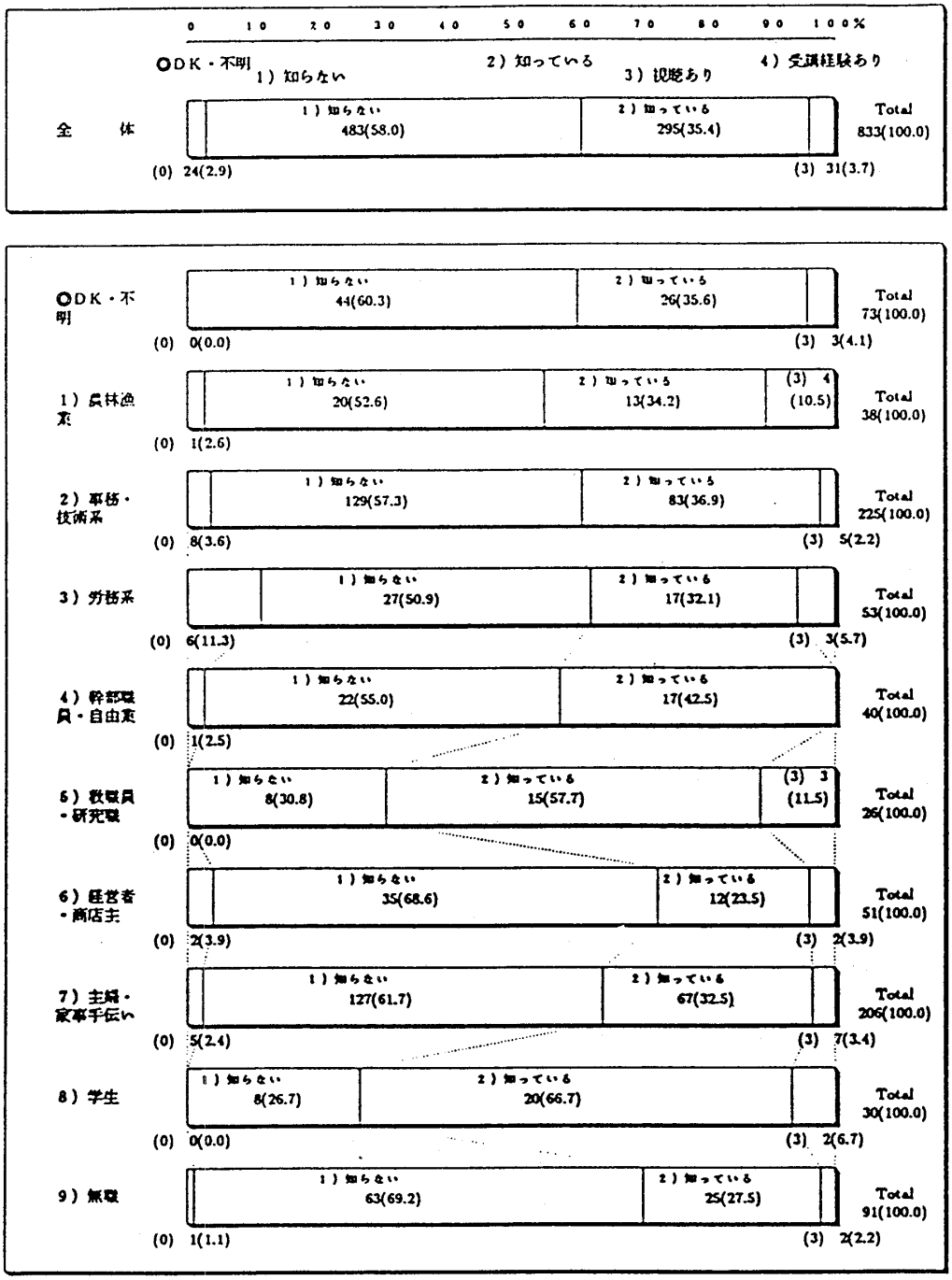


図　［センターの認知×職業別］

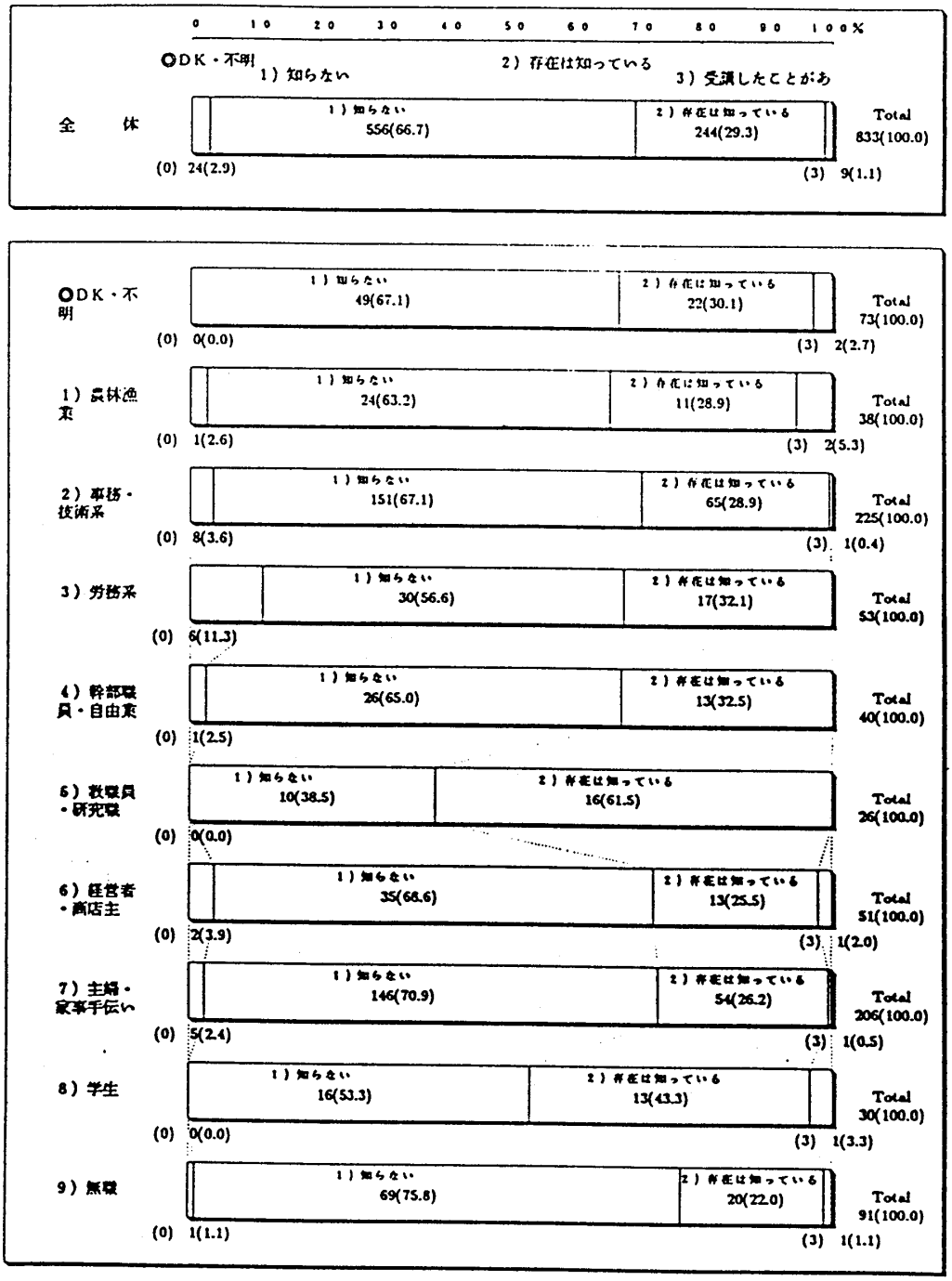
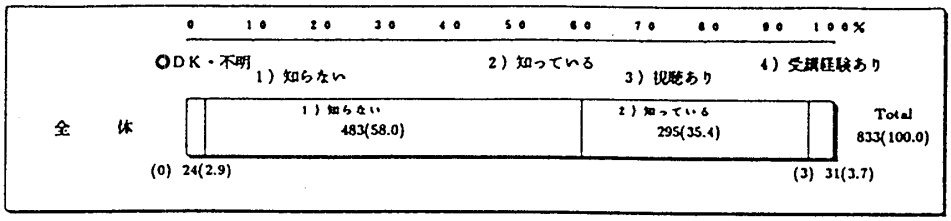


図　［放送講座の認知×『市政だより』の購読］



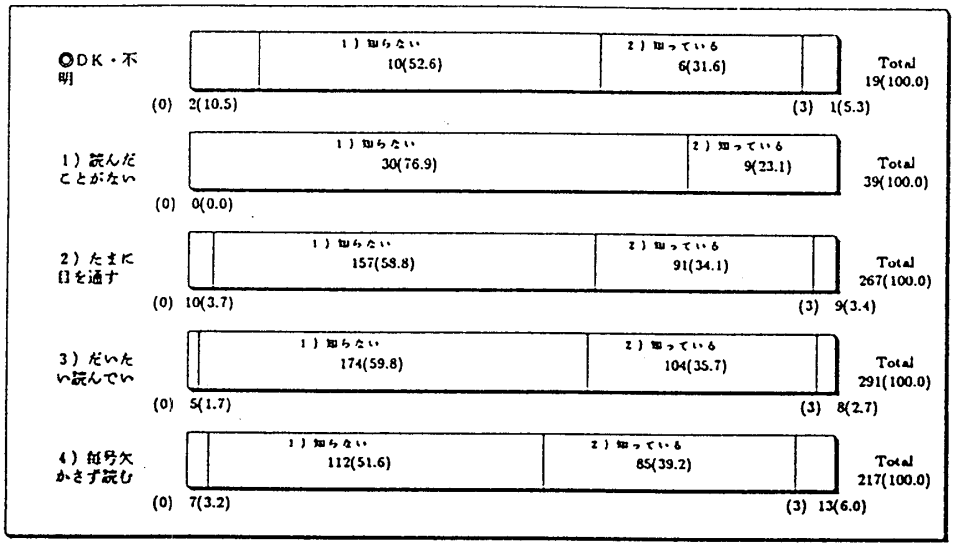
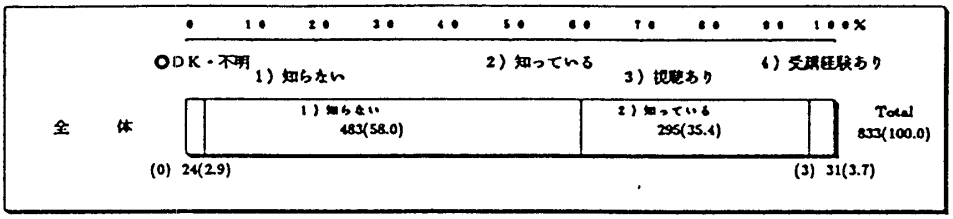


図　［放送講座の認知×粉塵公害関心度］



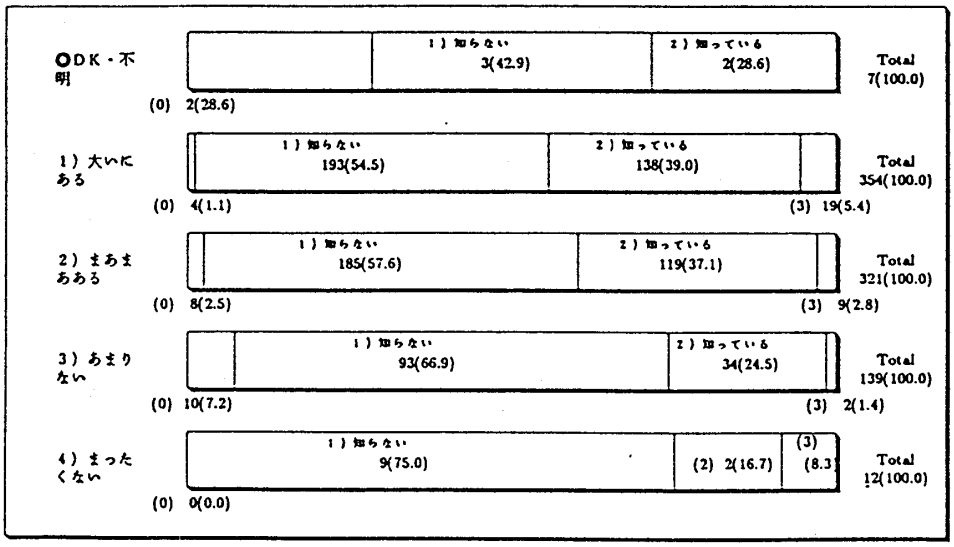


図　［センターの認知×『市政だより』の購読］

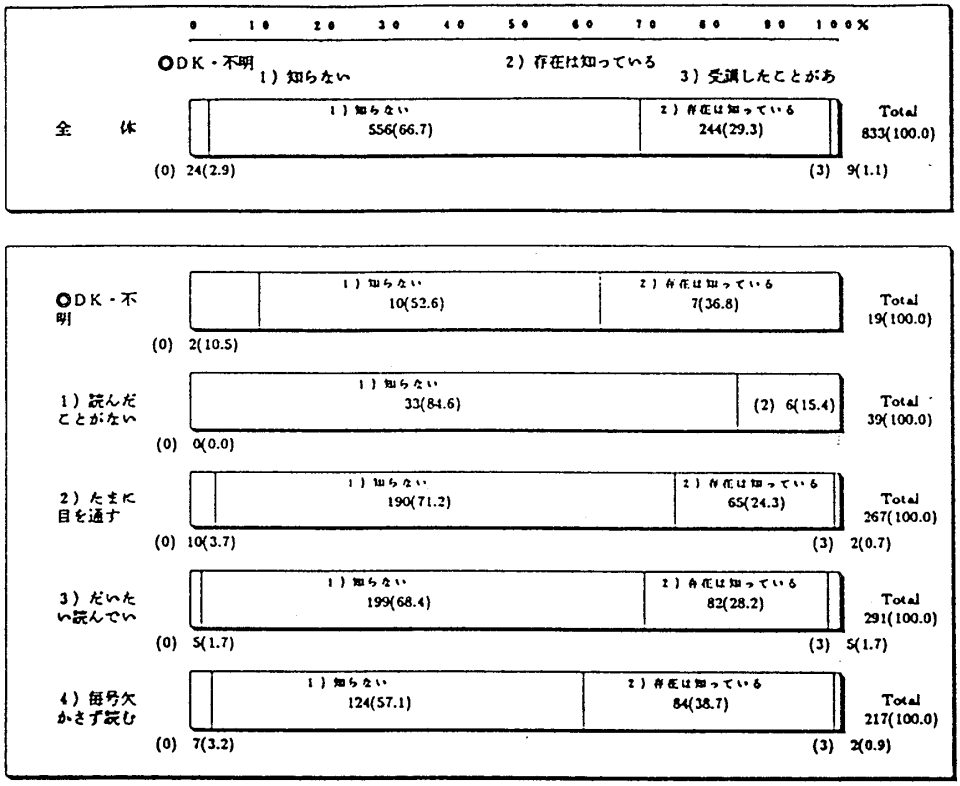
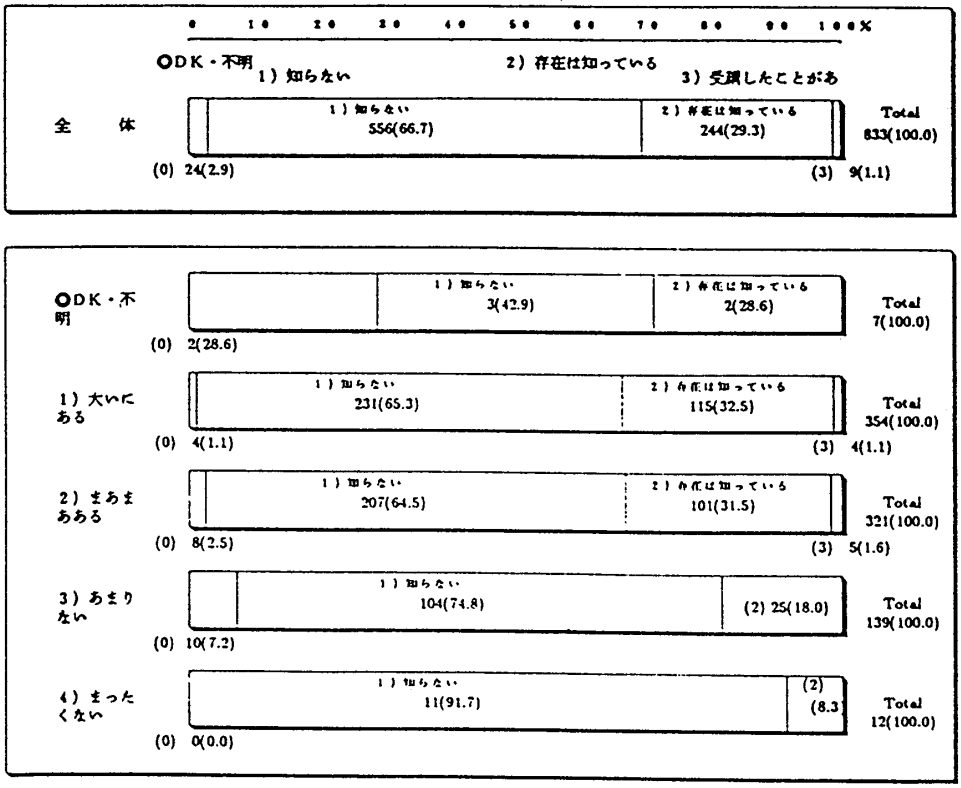


図　［センターの認知×粉塵公害関心度］



平成２年度放送講座申込受付状況

月　日	テレビ		ラジオ		備考
	申込数	累計	申込数	累計	
８月２４日	74(57)		67(51)		8/18河北新報掲載
８月２９日	27(12)	101	22(16)	89	
８月３１日	19(12)	120	6(5)	95	
９月　５日	9(3)	129	11(4)	106	9/1号仙台市政だより 亘理町民ひろば
９月１０日	21(11)	150	15(7)	121	利府町広報誌に掲載
９月１４日	16(3)	166	15(9)	136	※
９月１７日	11(4)	177	7(0)	143	受講申込締切日
９月２０日	6(3)	183	5(2)	148	
９月２５日	8(2)	191	5(2)	153	
９月２９日	6(0)	197	19(2)	172	開講式

※　９月１１日～１３日　「TBCプロムナード」（東北放送）で、
　　１分間募集案内を放送。
＊　（　）内は申込者中、昨年度受講生数を示す。

開放講座・世帯視聴率（テレビ）

	10月 6日（土）	13日（土）	20日（土）	27日（土）	11月 2日（金）	3日（土）	9日（金）	10日（土）	16日（金）	17日（土）
土曜日(7:00 ～ 7:30)	3.3	2.9	3.0	1.3		0.8		1.3		2.9
金曜日(11:00 ～11:30)					1.9		2.1		1.7	

	11月 23日（金）	24日（土）	30日（金）	12月 1日（土）	7日（金）	8日（土）	15日（土）	22日（土）	平均
土曜日(7:00 ～ 7:30)		2.6		2.5		3.0	1.8	2.6	2.2
金曜日(11:00 ～11:30)	3.0		1.3		2.3				

スポット時間取表

月　日	テレビ	ラジオ
8月11日（土）	7' 30"（30）	
12日（日）		22' 30"（20）
13日（月）	11' 45"（30）	16' 09"（20）
14日（火）	24' 30"（30）	22' 30"（20）
15日（水）	11' 45"（30）	16' 09"（20）
16日（木）	24' 30"（30）	22' 30"（20）
17日（金）	11' 45"（30）	
18日（土）	24' 30"（30）	22' 30"（20）
19日（日）	24' 10"（30）	
20日（月）		22' 30"（20）
21日（火）	11' 45"（30）	16' 09"（20）
22日（水）		22 30 (20), 23 55 (40)
23日（木）	11' 45"（30）	
24日（金）	24' 35"（30）	16 09 (20), 22 30 (20)
25日（土）		
26日（日）	7' 00"（30）	22' 30"（20）
27日（月）	24' 30"（30）	23' 55"（40）
28日（火）		22' 30"（20）
29日（水）	24' 30"（30）	
30日（木）	11' 45"（30）	16 09 (20), 22 30 (20)
31日（金）		
9月　1日（土）		22 30 (20), 23 30 (40)
2日（日）		
3日（月）		16 09 (20), 22 30 (20)
4日（火）		
5日（水）		16 09 (20), 22 30 (20)
6日（木）		
7日（金）		16 09 (20), 22 30 (20)
8日（土）		
9日（日）		22 30 (20), 23 30 (40)
10日（月）		
11日（火）		16 09 (20), 22 30 (20)
12日（水）		22 30 (20), 23 55 (40)
13日（木）		16 09 (20), 22 30 (20)
14日（金）		22 30 (20), 23 55 (40)

《第８回放送利用の大学公開講座シンポ》［第２セッション］　1991.2.22
「テレビ放送公開講座学習援助システムの開発」配布資料

大学・社会教育機関・放送局による
テレビ放送公開講座の「生涯教育ネットワーク」化

名古屋大学教育学部
今津　孝次郎

Ⅰ　「生涯教育ネットワーク」

（１）生涯学習時代の「学社連携」の様式

これまで社会教育の分野で「学社連携」が力説されてきた。学校教育と社会教育が結合してこそ、社会教育が充実するという趣旨である。そして「学社連携」は、たとえば学校施設開放、学校教師による社会教育活動への参加、あるいは、青少年保護育成における学校と社会教育機関の協同、さらには大学公開講座などのような形態でおこなわれてきた。ただ全体としては、「学社連携」という言葉は学校教育と社会教育との間にある壁に穴をあけ、両者が手を結び合うべきであるという初歩的なレベルでの指摘にとどまっていたように思われる。

しかし、近年新しく登場した「生涯学習」という考え方はこのレベルを乗り越えて、さらに両者の関係を発展させようとする方策を提起している。つまり、この新しい発想は、個人の学習を従来のように学校とか社会教育機関といった既存の教育機会の側に合わせていくのではなくて、むしろ各個人が生涯にわたって継続して展開する「生涯学習」の方を主体として、それをさまざまな教育機会が互いに有機的に結びつきながら支援する「生涯教育」システムの新しい構築を要請しているからである。それだけに、既存の学校や社会教育機関は常に自己革新を遂げていくことが要請されてくる。

したがって、諸個人の多様な「生涯学習」を充実させていくために、その学習者に添いながら可能なかぎり援助する「生涯教育」システムにおいては、「学社連携」という言葉は、より次元の高い「生涯教育ネットワーク」という用語に置き換えられる必要がある。それは、個人の「生涯学習」を支えるあらゆる教育機会がそれぞれの特徴を生かして手を結び合い、援助の力を強固にするために連関性を発揮した状態を指している。つまり、「生涯教育ネットワーク」は、従来の学習機会提供をいっそう活性化させて、量的にもまた質的にもレベルアップさせるためのシステム化なのである。

なお、「ネットワーク」といえば、「情報ネットワーク」のことがすぐに思い浮かぶであろうが、ここでいうのは、情報の連結も含めて、人的・物的資源を所有する諸機関の活動全体の関係性を指している。

（2）「ネットワーク」

ところで、金子（1986）によれば、「ネットワーク」とは「互いに異なる独自の個が、自らを主張しつつ相互に依存的な関係を持続しつつ、一定のまとまりを形成しているもの」である。ここで重要なことは、組織全体のために個があるのではなくて、個の自発性を優先し、個を発揮させるためにまとまりが存在するということである。したがって、そこには対立や緊張が生まれやすい。しかし、対立・緊張を回避するのでなく、積極的に評価するという点が「ネットワーク」という結合様式の特徴である。そこから、対立・緊張の解消からは出てくることのないような新たな発想や活力が生まれる。つまり、互いに違う個がそれぞれの知識や技術を補完しあうことで、一個ではできないことを可能にする、という連関状態である。

（3）大学のニーズ・社会教育機関のニーズ

「学社連携」を「生涯教育ネットワーク」として発展させていくことは、学校と社会教育機関が、互いに異なる特徴や諸資源（ヒト・モノ・情報）を十分に発揮しながら、それぞれの立場を主張しあって、そこから（対立・緊張の場合も含めて）生まれる補完的力を「生涯学習」者に提供していくということにほかならない。

一方、情報化や国際化のうねり、あるいは長寿化をはじめとするライフサイクルの変化などによって、成人教育の重要性が増大していること、さらには高学歴化の波も受けることによって、成人学習内容が高度化していることにより、学校のなかでもとりわけ大学が「生涯教育ネットワーク」においてきわめて重要な位置を占めている。そこで、大学と社会教育機関がどのようにして、このネットワークを構成しうるか、それぞれが持つ諸資源（これまで蓄積してきた利点）とニーズ（今後補うことが求められてくる弱点）を比較検討してみたい。まず、社会教育機関から見てみよう。

1）社会教育機関の資源とニーズ

社会教育機関には多くの地域住民がやってくる。人々の変化する学習実態や学習ニーズを直接的に把握でき、地域のリーダーや他の諸機関との関係も緊密である。長年の経験に基づき、成人学習者に関するさまざまの情報をもつ社教職員がいることが社会教育機関の資源であり、強みである。また、各地で最新の諸設備を兼ね備えた新しい生涯学習センターも設立されている。地理的にいっても、成人学習者に近いところにある社会教育機関の新しい建物・設備も豊かな資源である。

ところが、人々の学習欲求が高まれば高まるほど、また建物・設備が良くなれば良くなるほど、立ち遅れてくるのが学習プログラム（学習テーマ・内容・方法）の新開発や新採用である。ハード面の進歩に対してソフト面の遅れが目立ってきているのは事実であろう。

人的資源である専門職員の人数が少ないことが、この傾向に拍車をかけている。学習者の興味・関心が多様化し、学習内容が高度化し、「生涯学習」が高められるにしたがって、どの学習者にどのような学習プログラムをどのように提供していけばよいか、この点についてどの社会教育機関も模索している。

2）大学の資源とニーズ

一方、大学は専門的な知識・技術を蓄積し、さらに新しい知識・技術を開拓している。豊富な情報と研究設備、そして学識をもつ多くの研究者は「生涯教育ネットワーク」にとての有力な資源である。ただ、成人学習者との繋がりや、気軽に学習できる学習施設・設備という点では大学はそれほど資源は豊かではない。

もちろん、大学は従来から大学公開や講師派遣というかたちで社会教育と結びついてはいたが、それはまだ「学社連携」的レベルの枠内で、ささやかに協力するといった態度にとどまっていた。ところが近年、大学の方でも「生涯教育ネットワーク」に積極的に参画せざるをえない状況が生まれてきた。

第1に、「大学公開」の基本的な考え方に変化が見られる。つまり、専門知識を持つ者が無知な世間に対して「啓蒙」するというような姿勢から、先進研究で得られた新しい知識を広く還元し、日頃の研究に対して世間の「理解や支持」を得るという姿勢に変わりつつあるということである。

なぜなら、大学での研究は今や揺れ動く現実社会や人間生活環境と切り離れてはありえない。大学で専門知識を学んだ人々も増えてきて、大学は以前と比べるとかなり身近な教育機関となりつつある。あるいは、研究の財源を民間の諸機関に求めることも多くなっている。また研究活動は大学のなかだけでおこなわれているわけではなく、民間の研究機関と競合ないし協同して行われる場合もある。つまり大学はもはや知識の独占機関ではない。むしろ、世間の「理解や支持」を得てこそ研究を続け、発展させることができるという状況にある。

第2に、1993年から始まる18歳人口の減少は高等教育人口を低減させる。しかも、まもなく高齢化社会が到来する。これらの状況を念頭におくと、これまでのように20歳前後の若者だけでなく、成人や高齢者も学生として受け入れることを本格的に考えていかなければならない時代になってきた。すでに私立の短期大学のなかには成人のための高等教育機関として脱皮しようとする動きが見れている。大学キャンパスは、若者が実社会に出る前の一時的な通過場所ではなく、さまざまな年齢の人々の「生涯学習」の重要な場所になっていくだろう。

3）大学と社会教育機関の「生涯教育ネットワーク」形成

以上2つの変化は、大学を「生涯教育ネットワーク」の参画に向かわせる圧力である。いうまでもなく大学がこれまで蓄積し、いま開拓している情報資源は「生涯教育ネットワーク」にとって豊かな原料である。ただ、その原料を成人学習のプログラムとしてまとめ

るためには、学習者の実態をおさえながら、いろいろな加工を施す必要があり、種々の“学習実験”や調査研究が不可欠である。こうした作業を抜きにして、成人教育のソフトを開発することはできない。

このようにして、大学のニーズと社会教育機関のニーズは接点を持つに至る。もちろん、成人学習のプログラムを作成するといっても、成人学習の立場からの社会教育機関の主張と、専門研究の立場からの大学の主張とは必ずしもぴったりと重なるわけではなく、両者は緊張関係におかれている。しかしそうした関係からこそ、それぞれが単独ではなしえない発想や活力が生まれる。それが「ネットワーク」という関係様式なのである。

Ⅱ　「生涯教育ネットワーク」としての大学放送公開講座

（1）名大テレビ放送公開講座番組を利用した名古屋市立生涯教育センター「特別講座」の“学習実験”

1990年10～12月に名古屋市生涯教育センターで、平成２年度名大テレビ放送公開講座番組「食－人間生活とのかかわり」（名古屋テレビ放送）を用いた「特別講座：『食』を考える」が11回にわたって開かれた。この「特別講座」は、社会教育機関と大学による「生涯教育ネットワーク」づくりの可能性を探るためのひとつの“学習実験”であった。この実験には、新たな学習プログラムづくりを模索したい社会教育機関と、「大学公開」の意義をさらに深めたい大学、そして大学放送公開講座番組制作を視聴者の意見を取り入れながら改善していきたいテレビ局の３者が参加しておこなわれた。

３者は２、７、９、10月に４回の会合をもち、この「特別講座」の企画立案、運営方法などについて自由な討議を繰りかえすなかで、以下の諸点について合意した。

1）この「特別講座」は３者それぞれのニーズに応える企画である。

2）名古屋市生涯教育センターが主催し、名古屋大学と名古屋テレビは後援または協力という態勢をとる。

3）基本的には「放送利用学習」の方法を採用し、毎回45分の番組視聴のあと、残りの75分は番組担当講師を中心にして①補足講義、②質疑応答、③シンポジウム、のうち各講師の選択でいずれかの方法による学習を展開する。

4）“学習実験”として位置づけ、受講者や担当講師に対するアンケートをはじめ各種データを収集するとともに、「学習プログラム」としてどのような定式化が可能かを検討する。

そして、12月には受講生代表に３者が加わって放送番組や「特別講座」についての総合検討会を開いた。

（2）“学習実験”の結果から

３者による討議や、受講生を含めての検討会、各種アンケート調査などから得られた主要な知見は以下の通りである。

1）大学放送公開講座は「生涯教育ネットワーク」化されたときに、その学習効果を最大にする

大学放送公開講座では、大学でおこなっている講義をそのまま放送番組化するだけでは、視聴者にとっては一方的で、大学のひとりよがりにおわってしまう。放送局が放送メディアの特性を十分に生かし、しかも担当講師の意図や狙いを歪めることなく視聴者の学習効果をあげるような加工を施すことが必要である。

同時に、放送そのものは限られた時間内での一方的な情報伝達であるから、たとえテキストがあるにしても、学習者の疑問や問題意識が提出されて、さらにそれに応えるという「双方向性」がないと、学習は未消化で、中途半端なものにおわってしまう。もちろん、スクーリングはこの点をカバーするためにある。しかし、現行のスクーリング（大学内、平日午後６～８時、全４回）では地理的にも時間的にも制約があるから、「大学公開」のレベルはまだ低い状態にある。また、大学キャンパス内の大教室でとにかく講義を受けてみたいという欲求をもつ人々も含まれているから、放送利用という学習方法のメリット（放送視聴を踏まえてさらに学習を深める）が十分に生かされてはおらず、放送とスクーリングが積み上げの形ではなくて、別個のもののように並立して受け止められている場合がある。

地理的・時間的な制約を乗り越えながら、放送利用という学習方法のメリットを生かすようなさまざまな学習機会が地域の学習者の身近なところに設定されるためには、社会教育機関とのネットワーク化が要請されるわけである。

したがって、大学は興味深い学習テーマ・内容を提供し、放送局は番組をわかりやすく加工し、社会教育機関は広く学習者を集め、意欲的な学習プログラムを工夫するというように３者が役割分担をすれば、放送公開講座はもっと魅力あるものに仕上がるはずである。

３者が役割分担をして、それぞれの立場を追究しながら相互の連関性を高めていくことは、そこに「生涯教育ネットワーク」が出来上がるということである。この「ネットワーク」のなかでこそ、放送公開講座の「情報発信－受信」過程におけるさまざまな局面での具体的な「学習援助システム」（今津、1990）が実現していくだろう。

2）放送利用の双方向的学習は「生涯学習」を高度化させる

テレビ放送利用学習のメリットは、親しみやすい映像を用いた番組の視聴によって、基本的な知識や考える素材を踏まえたあと、学習者が質問や問題を出し合って、講師の助言や意見を交えながら、主体的な学習を一層深めることができる点にある。従って、ただ一方的に講義を聞くという従来から馴染んできた方法とは基本的に異なる（今津、1989a）。

また、「生涯学習」熱が広がるにつれて、多くの学習を積み重ねてきた人々が、今度は自分たちの問題意識や意見を表現したいと考えるようになってきている。伝統的な講義形式の学習方法ではそうした新しい動きに応えることは難しいが、放送利用学習は「生涯学習」の高度化に見合ったひとつの新しい方法である。今回の「特別講座」では、最初は学

習方法に戸惑った学習者たちも馴れるにつれて、積極的に討議に参加するようになり、学習効果に対する高い評価が得られた。

3）研究成果の還元についての大学研究者の関心は高い

今回、テレビ番組担当講師に「特別講座」講師の要請をしたところ、依頼したすべての方々に快く承諾していただいた。番組制作だけでも労力をとられるのに、そのうえ「特別講座」まで引き受けることは難しい、とおそらく半分ほどは多忙な方々から断られるだろうと予想していたのに、この結果はうれしい誤算であった。

講師の方々が「番組がどのように受け取られているかを是非知りたい」「テレビでは言えなかったことを話してみたい」「大学公開の種々の試みをすることは賛成」などと承諾された理由を聞くと、すでに述べた「大学公開の基本的な考え方」の変化が裏付けられるとともに、研究成果を放送や、スクーリング、市民講座などを通じて地域社会へ還元することに対して、大学研究者の関心は意外に高いように思われる。

4）「生涯教育ネットワーク」の広報活動を積極的に押し進める必要がある

「特別講座」は 200名定員で募集したが最終的な受講申し込みは75名で、大学でのスクーリング申し込みが 225名であったのと比べると、やや少ないという印象を受る。その理由としては、たとえば火曜日の午前中という時間帯の問題がある。また、内容は異なっていても「食」については他のさまざまな講座でも取り上げられていることや、あるいはテレビ放送利用の学習方法がもうひとつ掴みにくい、などいろいろ考えられる。

なかでも特に検討してみる必要があるのは、社会教育機関が大学や放送局と協力しながら開設するような、「生涯教育ネットワーク」に基づく講座という方式に市民はまだ馴染んでいないのではないかという点である。大学独自の講座なり、社会教育機関独自の講座なら分かりやすいが、共同の講座というのが性格的に理解しにくい面があるかもしれない。しかし、今後「生涯教育ネットワーク」の学習機会が増加していくとすれば、この種の新しい形態の講座を知ってもらい理解してもらう広報活動を工夫し、積極的に展開していく必要がある。「特別講座」の学習者との検討会でも、「意義深い講座だから、ＰＲをもっとしっかりやるべきだ」という意見が出されている。広報の量を増やすだけではなくて、「生涯教育ネットワーク」の特徴や、放送利用学習も含めて「生涯学習」の高度化を理解してもらうような新しい啓発内容も織り込んでいくべきであろう。

【参考文献】

今津孝次郎（1989a）『増補・生涯教育の窓』第一法規出版、第５章「テレビで学ぶ」。
今津孝次郎（1989b）「放送利用学習から映像メディア学習へ」『社会教育』44巻６月号。
今津孝次郎（1990）「情報発信－受信関係から見たテレビ講座学習過程」
『平成元年度放送利用の大学公開講座調査研究報告書』放送教育開発センター
金子郁容（1986）『ネットワーキングへの招待』中公新書、第１章。

名古屋市民大学特別講座

「『食』を考える」　受講者募集中！

名古屋市生涯教育センター

「飽食の時代」といわれる現代。人文科学・社会科学・自然科学の各分野の専門家によって、「食」のもつさまざまな顔を取り上げ、総合的に人間生活とのかかわりを考えます。

この講座は、名古屋テレビから放送される「名古屋大学放送公開講座」を利用し、生涯教育センターで名古屋大学の先生方の講義を聞いて、わかりやすく学習を進めます。ぜひ、ご参加ください。

☆ 日　程　　10月2日（火）～12月25日（火）の
　　原則として火曜日　　11回
☆ 時　間　　午前10時～12時　（ただし、10月2日のみ9時30分から）
☆ 受講料等　　3，200円（テキスト代　1，000円を含む）
☆ 会　場　　名古屋市生涯教育センター
　　および　　〒460　中区新栄三丁目15番45号
　　申込先　　☎（052）251－1571

主催　名古屋市生涯教育センター
後援　名古屋テレビ放送株式会社
協力　名古屋大学

学習プログラム

回	月・日	学習内容	講師
1	10　2 （火）	食文化のあけぼのと 日本古代の食文化	文学部史学科 教授　渡邊　誠
2	10・16 （火）	食と風土と文化	教養部 教授　熊野　聰
3	10・23 （火）	現代の食文化と 青少年の発達	教育学部教育学科 助教授　今津孝次郎
4	10・29 （月）	生命現象と栄養	理学部分子生物学科 教授　林　博司
5	11・13 （火）	長寿と栄養	医学部医学科 助教授　吉峯　徳
6	11・20 （火）	運動と食物	総合保健体育科学センター 助教授　近藤孝晴
7	12・1 （土）	健全な食品	医学部医学科 助教授　太田美智男
8	12・3 （月）	食品の品質と機能	農学部食品工業化学科 教授　中村　良
9	12・10 （月）	食品工業における新技術	工学部化学工学科 教授　小林　猛
10	12・18 （火）	国際政治と食糧	法学部政治学科 教授　田口富久治
11	12・25 （火）	食糧の自給と農業問題	経済学部経済学科 助教授　足立文彦